227
特227-742
1200701034192
225

同同日記

三の巻

家喜著

始

特227
742

帝國圖書館藏

日月日記

三の巻

月の家著

昭和四年 自二月十五日 至三月廿一日

昭和四年八月 帝國圖書館藏

【著者】出口聖師揮毫の書と畫

日月日記　三の巻　目次

昭和四年二月

十五日　於紀勢線車中……一頁
仝　日　於湯淺支部……五
仝　日　於和歌山分所……八
仝　日　於紀勢線車中……九
仝　日　於南海線車中……一五
仝　日　於歸龜車中……二二

十五日於高天閣……二五
十六日於車中……三〇
仝日於京都分院……三一
十七日於明光殿……三七
十八日於明光殿……四七
十九日於高天閣……四九
廿日於高天閣……五四
廿一日於高天閣……六四
廿二日於高天閣……六七

廿三日於高天閣……六九
廿四日於高天閣……七九
廿五日於高天閣……八四
廿六日於高天閣……八八
廿七日於高天閣……一〇三
廿八日於高天閣……一〇七

三月

一日於高天閣……一一三
二日於高天閣……一二二

三日於高天殿……一四五
四日於高天殿……一五九
五日於高天殿……一七七
六日於高天殿……一八七
七日於高天殿……一九八
八日於高天殿……二〇九
九日於高天殿……二二二
十日於高天殿……二二五
十一日於高天殿……二三四

十二日於教主殿……二三八
十三日於教主殿……二四一
十四日於教主殿……二四三
十五日於高天殿……二四五
十六日於明光殿……二五七
十七日於高天殿……二六六
十八日於高天殿……二七五
十九日於高天殿……二七九
廿一日於高天殿……二九一

目次をはり

廿一日於教主殿……二九六

日月日記 三の巻

昭和四年二月十五日　於紀勢線車中

朝八時比井の分所を立出でゝ自動車はせて湯淺に向ふ
信徒に御坊の町に袂別し又も湯淺をさしてはせ行く
朝十時湯淺の支部に立入りて晝飯よばれ神言を宣る

汽車を待つ間の長きつれ〴〵に歌なぞかきて時を待ちたり
午後一時少しく前に湯淺驛信徒に別れ和歌山に向ふ
藤波の驛に來れば右左丘は柑樹に包まれてあり
風强き故にやあらむこの邊り家棟は並べて高からぬかな
高野山たれ流しなる有田川は川幅ひろく水淺きかな
稍高き山をめぐらす宮原の驛のあたりの廣やかなるかな
山腹に村落あまた立ち並ぶ蕪坂道陽にはゆるみゆ
柑橘樹山頂までも開かれし段々畠は鎧に似しかな

有田川へだてゝ近く須佐神社神森青く神さび立つ見ゆ
除虫菊產地と聞えし山田原は菊と蜜柑の畑ばかりなる
箕の嶋の驛の北方俵きて蜜柑の林立ちならぶみゆ
人殺しお柳の家や死人をば埋めたる畠窓外に見る
慾のため二人の男を殺したる椒村を顧みつ行く
米材を積み込み來る下津港は波も靜に春陽かゞやく
下津驛來りて見れば枕木の所せきまでつみ重ねあり
老松の茂れる森の下かげに加太の神社の鳥居かゞやく

いろ〳〵の看板あまた立ち並び風致よからぬ加茂郷の驛
帆前船林の如く立ちならぶ塩津の濱より淡路島見ゆ
風光のよき和歌の浦眼にさえて沖の白帆の胡蝶に似しかな
岩嶋の上に一本稚兒松の生ひて美はし濱邊近くも
日方驛來れば和歌山分所より小旗携へ信徒來れり
松しげる山波見えて野邊ひろく二番の札所紀三井寺見ゆ
稚姫をいつき祭りし玉津島神社の森の近く見えつゝ
紀三井寺驛より天神山見れば麓に玉津嶋神社あり

○

於湯淺支部

百千鳥聲さわやかに啼き渡る比井の濱邊の朝ぼらけかな
夜もすがら磯打つ波の音たかく寢耳に響く比井の濱かな
艪の音も遠く聞こえて風寒く靜心なき比井の宿かな
沖遠く白波蹶立ていより來る比井の濱邊の船笛高し
斯くまでに思はるゝとは白川の安珍日高の川風寒し
吹きまくるあらしの音に目醒むればねやの電燈光かそけし

娘等のねいきに内は家の外は暴風の音に寢られぬ夜半かな
由良の戸をたゝく疾風の音高く明け行く春の寒き今日かな
盧沙耶神御堂の外にふるひつゝ潮風寒き勝樂寺かな
海の面白浪花にまがひつゝ寒風かをれり庭の白梅
千早振神代の手振うつし國神の社の莊嚴なるかな
繪にすればさやかなるらん和歌の浦波にきらめく朝日の光は
景色よき紀伊の海岸へめぐりて吾日の本の國の秀を知る
せきとむる術さへもなき日高川戀路の淵に沈む清姫

天國に遊ぶ心地す瀞八丁躑躅の花の眞盛りの日は
願はくはこの暖國に永久に惠まれ神敎傳へたきかな
平和なる國の姿や右左蜜柑畑のみ續く平原
眼にふるゝ物皆美しこの國は神の惠の深きうづ國
畫のやうな美人に朝夕かしづかれ永久に住みたしこのうまし國
靈塲は一番那智山次紀三井三番粉川の法のうづ國
永遠に忘れざらまし道成寺鼻たれ坊主の繪葉書賣る姿は
大本の王仁は遙々道成寺來て借形にあきれけるかな

こゝかしこ蜜柑畑のみあか〳〵とかゞやき渡る紀の國路かな

僧侶まで繪葉書賣する道成寺末法の相眼のあたり見る

遠うの道ものともなさずたづね來る信徒たちの心たのもし

野も山もカーブの多き紀の國路はせ行く車の寒き今日かな

法燈の滅せんとする道成寺ローマンスにて息つなぎつゝ

○

於和歌山分所

和田川の流れも清くすみきりて松かげ映ゆる彌勒山かな

九年ぶり再び和歌の地を踏みてその開けたるに驚きにけり

○

於紀勢線車中

新らしき年を迎へて身も魂も和歌山縣下に梅の教說く

芳ばしきしら梅の花に送られて今日花明山にかへりごとせむ

さすがにも紀伊は南國寒さをば余所に白梅かをるうづ國

靈幸ふ貴の御國に三日の旅歸り行く身の惜しまるゝかな

なやましき今日の寒さを白梅の清けく匂ふ紀の國路かな

春立てば紀の國原は一入に暖かくして梅早やかをれり
眞幸國惠まれし國暖い國山野に金の生る木充つ國
山川の眺めさやけき紀の國は神の守る國吾好む國
來年も亦來て見たく思ふまで山紫水明飽かぬ紀の國
和歌山に來りて五十五萬石昔の狀の偲ばるゝかな
いすくはし神の大道を傳へんと今紀の國の旅を爲すかな
紀の國に鹿嶋立ちして思ふかな若彦司のありし昔を
敷嶋の大和大道をまつぶさに傳へんためと紀の國の旅

千早振神代の木の國おもふかな山々大樹の化石ある見て
和妙の綾の高天の地の御名に同じ名のある紀伊の國かな
久方の天津御空に照る月の一入清き紀の國路かも
蜜柑畑行く先々に赤々とかゞやく紀の國家の秀高しも
伊都能賣の神の教にあこがれて聖地へ紀の國人の多かれ
龍神の腮の玉も手に入れし清彦照彦しのぶ紀の國
古への常楠仙人神魂幸ひしるき紀伊の神國
產土の神もこぞりて迎へけり世に伊都能賣の降る春の日

國魂の神は日の前國懸かす仕へ奉れよ五六七神政に
素盞嗚の鎭まりゐます三熊野の神の社は食國の魂
月の神知召すべき世となりぬ力をつくせ日の前の神
奴羽玉の暗き斯の世はあけがたの有明の月まつの御代かな
踏み迷ふ世人こと〴〵あなひの廣げき道をさとす大本
昔より例も知らぬあなゝひの道行く人は惠まれてあり
行くとして可ならざるなき大本の道は誠の神の大道
留守にして佛も坊主も居らぬなり澆季末法の破れ堂の内

牛馬と成りて御國に盡さんとちかひし吾の今日の幸かな
選まれし神の司の四方より集ひ來れる和歌山の空
けもの等のサックとなれる人草をその大本に戻す教かな
世界一神の御教をしら浪の沖に漂ふ人救はゞや
手も足も出さむ餘地の無き迄に行き詰りたる闇世なりけり
念頭をはなれざりけり甲子の春夏かけし蒙古の神業
へだてなき神の教も信徒の心によりて神を隔てつ
眼にみえぬ神のみいづをしら雲の余所の教に迷ふ曲かな

襟にわく虱でさへもまゝならぬ人の身なれば只神に依れ
戀愛の向上したる曉は只神のみを戀ふる身となる
繪馬堂に入りてし見れば凡俗の慾の皮のみさらされてあり
鬼大蛇狼獅子も驚かむみろく三會のあけの鐘の音
衣手は涙の露にぬれにけり神の慈顔を仰ぐ刹那に
底知らぬ濁りの淵に沈むとも神の惠はかはる事なし
常世行く闇を晴らして月と日の教にまつらふ神の世とせむ
野に山に神の惠の溢れたる紀の國原は長閑なりけり

秀妻國嶋の八十嶋へめぐりて其の名に叶ふ紀の國を見し
百千里國の秀家の秀いや高き紀の安國は惠まれし國
よろこびの花咲き匂ふ和歌山の今日の生日の花やかなるかな
大本の誡の御教日と月を重ねて廣し海の外まで
論語よみ論語を知らぬもの知りの馬けつ冠ぶりし人に教はる

○

於南海線車中

八臺の自動車並べ和歌山市驛頭さして急ぎ出で行く

午後六時前の電車に搭乘し一行十二人難波に向ふ紀の川の清流渡ればたそがれの幕山の端ゆおりそめにけり降雨なきためにや山池水かれてふく風寒し黄昏の空右左松の林につゝまれて孝子トンネルくゞる夕暮松茸の豊に産するこのあたり松の林の勢ひよきかな急行車孝子の驛も突破してたそがれの闇わけつゝ進む右左山と山とのせまりたる細き田圃に電車はせ行く大空に灰色の雲ふさがりて車窓の外は風靜かなり

紫の雲西天にたなびきてたそがれ寒き深日の驛かな沖遠く眼にかすめつゝ磯の松透してみゆる白帆三つ四つ淡の輪の驛に來れば遊園地木々の木の間に電燈靜けし大空に六日の月はあり乍ら雲深うして見えぬ宵かなさゞ浪の靜かに寄する海岸を進む麗夜心地よきかな沖遠く雲と浪との差別さへ定かに見えぬ和泉灘かな箱作驛にて海岸見わたせば淡路嶋山浪の秀に浮く磯馴松二本三本浪際に並べるさまの詩的なるかも

何宗の寺院か知らず傘松の一本立ちて淋し夕暮
鳥取の莊とは云へど魚をとる網の干しある濱邊の村かな
山遠く海又廣くあちこちの村に輝く電燈美はし
松林間近く見えて海の面にいさり火三つ四つ暗を照らせり
右左自惚鏡となりにけり電燈輝く玻璃窓の中
海近み山遠みつゝ月さえて野空靜けき樽井の驛かな
家々の電燈長く連なれる岡田野浦の長閑なるかな
宣傳使信徒等に送られて今日花明山に歸る吾かな

幸先も吉美の里に來てみれば海のかなたに紫雲棚曳く
右左電燈あかく輝きて心持よき佐野の驛かな
細長き軒灯燈にうどんそばしるして賣れる佐野の驛かな
海遠み山遠みつゝ廣野原進む電車の足早きかな
松の岡並ぶあたりにちらく〳〵と火かゞやまたたく鶴原の里
一本の杉の老木のたけ高く暗に映えたり野の村の空
野の奥に火影三つ四つまたゝきて海の面いよゝ遠くなりけり
黑煙を吐きつゝ煙突二つ三つ暗にはえたる貝塚の驛

驛の名を記す文字さへ見えぬまでひた走りゆく電車の早きも
野に山にけはあり乍ら蛸地藏とはいぶかしき地名なるかな
征矢を射る如く進みし岸和田の驛より下る軍人の群れ
岸和田の驛とはいへど海遠み村の火影の長くまたゝく
野も山も更生氣分たゞよへる春木の里は賑はしきかな
右左火影は遠くなり行きて轍の音のます〳〵高きも
こんもりと小山の如く松林夜目にはえたる忠岡の里
家數も大津の里の黄昏は輝く電燈華かなりけり

阿部童子産みし狐の古跡なるくづのはの里過ぐるねむたさ
大空を翔けるが如く走りゆく電車の早き羽衣の驛
乘降の客足繁き濱寺の驛のホームは一入廣げし
大空の雲跡もなく散り失せて明皎々と六日月てる
上弦の月大空に輝きてあたり清けきすはの森かな
浪の音近く聞えて風清き春の夕べの港驛かな
港驛過ぐる間もなく龍神の驛につきたり長蛇の電車は
龍神の驛に來れば宣信徒川下、辻岡兩氏同車す

右左電燈廣く輝ける夜の堺の町を見て行く
電燈の長く續ける大濱の遊園地見ゆしちだうの驛
築港のあたり遙に見渡せば炎の海の如くなりけり
玉手驛住吉驛も知らぬうち乘り越しにけり雜談の間に
漸くに此處まで歸り岸の里天下茶屋過ぎ萩の里すぎ
今宮の驛矢の如く突破して終點難波の驛に入りけり

○

於歸龜車中

難波驛降れば大阪在住の宣信數多出迎へてあり
自動車を數臺並べてまつしぐら梅田の驛でストップをする
午後七時半の汽車にて梅田驛宣信數多に送られて去る
多籠の咲くこの花の難波津の夜は輝く火の華の海
淀川の鐵橋渡り空見れば近星添ひて月さえわたる
一つ星月と光を爭ひつ山の端高く靜かに輝く
空の奥極みも知らぬ星の海に船形の月靜かに浮べり
我車淀の鐵橋渡るらん轍の音の一入たかきも

室内に客も吹田の驛こえて急行列車はひた走りゆく
唯見れば火影ばかりの夜の町瞬くさまの浪に似しかな
中天に月はゆれど山の邊は雲たちこめてほの暗きかな
走りゆく汽車の窓より吹く風は春の夜ながらも耳にかみつく
洋服の男が二人ドアあけて眼玉むきつゝそりかへり來る
難波驛に吾待ちわびし吟月は白齒むきだし蜜柑喰ひ居り
茨木の驛よりみれば丹波路の山々黑き雲に包まる
また一つみかんを口に入れよつた田螺のやうな目玉むきつゝ

一つ星輝きわたるとよくみれば山の上にてる電燈なりけり
別院の火影を顧みかへりみて名殘惜しみつ別れ行くかな
高槻の驛に來れば急行のためにや信徒の影も見えなく

於高天閣

○

山崎の驛より空を眺むれば天王山に月はかゝれり
山崎ゆ都へのぼる汽車の足殊更早くなりし心地す
吾汽車は都を指して向日町桂の鐵橋渡る速さよ

漸くに七條驛に下車すれば宜信數多出迎へて居り
大和博士始め粟辻中村氏等二條驛迄同車見送る
花園の驛に近めば御空より雪ちら〳〵と降り出しけり
花紅葉雪の名所の嵯峨の驛風に散り來る牡丹雪かな
嵐峽館電燈水に輝きて雪降るまゝに美しきかな
何時の間にか八つのトンネルぬけ出でゝ山本口に吹雪はげしも
高天閣電燈あかくまたゝきて吾歸り路をてらしけるかな
花明岡の驛下車すれば宜信徒かきを作りて吾迎へ居り

吹雪する野路を自動車馳せ乍ら高天閣の前に降りたり
杉山氏安藤宜使伴ひて吾に逢はんと朝より待ち居り
東京に出張したる御田村氏吾乘る汽車と共に歸れり
和歌山の吉田氏津村氏外數名天恩郷迄吾を送れり
珍らしき印材一個大阪の生一佐兵衛氏贈り來れり
くれ〳〵やもろ〳〵くさ〳〵いろ〳〵と吾一人を目的に入り來ぬ

○隨行日記

加藤明子

二月十五日　比井分所——天恩郷

昨夜來聖師様には御熟睡遊ばされ、午前七時御機嫌よく御起床遊ばされ、御入浴御食事を済まされ、八時半歸途につかれんとて自動車を馳せて湯淺に向はる。吉田、津村宣傳使を初め隨行多し。十時湯淺支部に入りて御休憩の後、數十枚のお歌、繪などをものされて賜り、御晝食後、小照をとられ、御先達にて神言奏上あり、午後零時四十九分の汽車にて和歌山に向はる。このあたり一面の蜜柑畑にして晩秋のながめ嘸かしなど噂す、今は夏蜜柑の黄なるが時を得顔なり。箕島事件として有名なるお柳の家、死體をうめし畑など見ゆ、中將姫の住み居たる寺は宮原附近にありなど聞く。東和歌山驛につけば多數信徒の出迎へあり、自動車數臺を連ねて和歌山分所に入る、時に午後二時十五分なり。中川和歌山警察署長の來訪あり御

歡談數刻、氏は數ヶ月前迄綾部警察に長たりし人なり。お禮後小照を撮られ、お歌五十二首繪八枚を御揮毫あり、午後五時五十八分南海線にて御出發、御見送りの多數宣信徒が打ち振る十曜の手旗に名殘を惜しまれつゝ大阪に向はる。吉田和歌山分所長、津村比井分所長島田宣傳使初め一行七人隨行して天恩郷までお見送り申上ぐ。難波驛につけば内藤宣傳使初め數多の宣信徒の御出迎へあり、直ちに自動車をはせて梅田驛に向ひ午後七時半の急行列車に投じて歸郷の途につかる。八時十分京都驛につけばこゝにも多數のお出迎へあり、大和博士、栗辻、中村宣傳使など二條驛まで見送らる。矢を射るごとき、慌たゞしき旅をつゞけて九時二十分、亀岡驛に着、人垣をつくる多數の信徒達のお出迎への中を御機嫌よく高天閣にお歸り遊ばされた。此日新に宣傳使に任ぜられたる人々左の如し。

富士本喜久、濱端善市、小川清大の三氏准宣傳使に、天野喬一郎氏宣傳使試補に。

二月十六日　於車中

朝眼能く南桑の野を見渡せばまだらに積める雪の白浪

朝八時東京たちて安藤氏〇〇に就き報告に來る

紀の國の別院設置に相關し參議の數氏挨拶して行く

午前十時半の汽車にて大學の眼科に行かんと自動車をはす

一行は閑樂明月清月や滿月照子八重野の六人

杉山氏安藤宣使も同車して伊豆湯ケ島に歸りてぞ行く

萩原氏愛善會の宣傳に九州さして下りてぞゆく

月宮殿あとに廣原馳せゆけば窓打つ風の頰に染みわたる

淙々と流るゝ溪水下に見て進む旅路の清々しき哉

於京都分院

〇

月宮殿落成記念

君が代は千代萬代に動かざれと石もて造りし月宮殿かな

〇

葦原の中津御國はさやぎけり救はせ給へ伊都能賣の神
惟神道を歩まぬ葦原の國のゆく末悲しまるゝかな
騒がしき世とはなりけり西東南も北も葦原の國
高光る神のみいづを白雲のよそのゑになびくしこ草
何事も神の御業と白浪の沖にたゞよふ葦原の國
春立ちし今日この頃の寒けさは日の御惠を白雪のつみ
眞心は藥にしたくもなきまでにまがり果てたる闇世なるかな
日本魂海底深くかくろひて醜魂ばかりときめくみ代哉
羅生門に鬼の棲みしは昔なり今は市中に人鬼の住む

稚姫君神の命の御敎は現幽神の要なりけり
古の花の都に引かへてさぐめの都となりにける哉
岐美ケ代の千代の礎固めんと石の宮居を月の花明山
白雪の深きになやむ北國の空にも月はかゞやき渡れり
地の上にありとあらゆることゝは皆皇神の寶なりけり
忍辱の衣まとひし愛ながの宗圓法に泥壘を吐く
久方の天津御國の莊嚴を地上にうつす綾の鶴山
三千年の經綸の幕も明烏啼きつる空に有明の月
五十鈴川清き流の水底にうつるは月の鏡なりけり

流水の如くに清く美しき神の數の湧ける玉の井
種々の國魂石を積み上げし寶座は神のみあらかなりけり

○

二條驛車下れば別院の宣信自動車用意して待てり
安藤氏八重野に別れ二條城南の分院さして馳せ行く
粟辻氏鈴木滿月伴ひて大學病院眼科に向ふ
大和博士紹介により眼科醫長市村博士の診察をうく
右左視力の度合調べ終へ白川眼鏡店に馳せ行く

午後の二時清水坂の樂吉に註文ありて急ぎたち行く
歸るさに大和博士の宅を訪ひ夕飯よばれ絹本を書く
午後の五時粟辻宣使に迎へられ京都分院さして急ぎぬ
分院のおもてに宣信堵列して笑みをたゝへて吾行を迎ふる
分院の神の御前に拜禮を終りて色紙短冊をかく
山海の珍味にあきて午後八時半過ぎ二條の驛に向ひぬ
二條驛來りて見れば安藤氏八重野の姿驛庭に見る
プラットに神旗うちふる信徒に別れ惜しみて歸り路につく

龜岡の驛に一行下車すれば信徒例の如く出迎ふ
堵列する信徒たちをかきわけて天恩郷に自動車馳せたり
昨日までおそひ來りし寒風も春めきたちて暖かき宵
暖かき夢を結びて高殿に初春の夜を明しけるかな
吹く風もどことはなしに柔かく心地良きかな初春の宵
神苑の林に風の波立ちて見る眼さやけき春の夕暮れ

二月十七日　於明光殿

白々と庭の面におく霜の眞砂に早くも下駄の跡あり
月宮殿ふりさけ見れば清庭に西山檜植ゑ込みてあり
高天閣裏の階段下り行けばうち水凍りて足元危ふし
玉の井の敷地につきて齋藤氏高天閣に訪ね來にけり
新居濱の白石夫人吾訪ひて安生館にすべり込みたり
今日もまた西山檜一本を月宮殿の庭にさしけり

大淀の岸にもやえる漁船のゆれつゝ潮のおしよせ來れり
虫喰ひを防がん爲と支那筆にわざ〳〵墨をふくませて見る
麗はしく咲きほこりたる鷄頭の種こぼ〳〵くむしられてあり
櫟原の並樹の松の空高く霧おしわけて朝日昇れり
眞夜中に玻璃窓たゝく荒風の音高くして何か淋しき
木枯の吹きすさぶなる寒き野に嬉々と遊べるいたづらの群
竹籔の影堀の面に浮びつゝ風暖かし春のあけぼの
笑ふ事いとも少なくなりにけり主の旅せし明光殿の内

望む事一つなけれど何となく頼もしきかな春立つ朝は
小庭邊に雨の雫の玉抱へふくらみ初めぬ白梅の蕾
信ずるの心深くて戀人に幾月逢はずも惱ましくなし
夕燒のうつる畑に柿の實の赤々實る麗しさかな
萠え初めしみどりの小川水ぬるみあひる三つ四つ浮ぶ眞晝間
豐かならぬ吾家の内もこのあした餅つく音に賑ひにけり
めい〳〵と啼きつゝ小路をひかれ行く賣られし小牛の憐れなるかも
堀の面に影をうつせる常磐木の梢ゆたかに鶯鳥のほれり

書をよみて疲れし頭にひゞきけり屋根をよもして落つる雪げに

大空にたゞ一筋の流星の輝く間なくほろび失せけり

裸木の公孫樹の梢にかさゝぎの鳴き渡りつゝ夜は明けにけり

春されば都大路の四辻もひねもすたてる土ぼこりかな

○

細溝にかけし板橋霜おきて息づく如きせゝらぎの音

田の畔に霜しろ〳〵とありながら蠶豆のびたり紀の國の原

吾乘りしまつりの象におく霜の朝日をあびて湯氣の立ち居り

春立ちし今日此頃の里川は名ばかりにして若草もなし

いづれかの頭にならんと元朝の朝かしら芋不味けれど食ふ

人心慾を思はぬものはなしよくない人は悪い奴なり

夜もすがら雨の降りしか紅梅の花の蕾の張りのしるきも

この冬を思ふ事なく過ぎ去りゝ春の芽ぐみを期待しながら

眞夜中に眼さまして見し夢の跡を辿れば微笑の湧く

賃金の七八分まで酒にする男の息のほの臭きかな

庭の面の木犀の枝の白きまで雀集ひて糞かけて居り

たま〳〵の雨を嬉しみ子供等は日傘をさして庭に出て居り

松風に夢破られて逝きし君の事思出でぬ淋しき眞夜中
南緣の障子に寫る雪解けの雫の影を見つゝ書を讀む
丹波霧限なく晴れて愛宕山薄紫に冴え渡りつゝ
行燈の灯かげに泣きし父の死を思へば暗き思ひにしづむも
爐の傍に語り給ひし吾祖母の御伽話の今もなつかし
南桑の野に木枯の吹き渡り白雲のあし早く馳せ行く
有明の月の殘れる曙に澄み渡るなり雉うつ銃身音
雲たれて風さへもなきこの夕べ雪もたらすか息の冷ゆるも
一人寢の冬の夜さむく君思ふ窓邊に近く千鳥鳴くなり

朝まだき起き出て見れば斑鳩の驛庭の面にすみ渡りけり
小夜更くるまで歌がるたとりしてふあとに蜜柑の皮の散り居り
田舍女の薪を背おふ後より追ひせまり來る春の山風
麥の畑青づき初めて如月の空にたなびくうす霞かな
一二輪咲き出したる白梅の花にほゝゑみ接吻けて見し
藁屋根の雪に天津日照り初めて落つる雫のまぶしくもあるかな
紅の匂ひ淋しく冬椿雪をかぶりてふるふ夕暮
水底に影を落せる捨舟の夕べの湖の靜かなるかな
百草の芽に生き〳〵と見ゆるかな春を迎へし嬉しさの色

鈍き陽はさしつゝ雪にみたされて眞晝の墓地に山茶花の咲く

松雲閣うたゝねすれば小雲川せゝらぎの音神秘をさゝやく

春の日の淺黄にすめる大空は麥生の畑のうつれるなるらん

窓あけて梅見し春の寒き日の夢繰り返すくつろぎの吾

薄雪の積む庭の面の麗はしき上に印せる犬の足がた

忍び男の何時來りけん朝戸出の庭の深雪につゞく足がた

東より訪ね來りし麗人の歸る夕べの措しまるゝかな

一瞥に城傾くるあで人の委し見れば魂は飛び行く

百度も千度もたづねてお餓さん瑞のみたまのすめる都へ

懸歌を詠めば涯を落すかとタオルを膝にあてる總角

清々し月の宮居の廣庭の檜の枝に月はかゝれり

○

下戸さへもつきあうて飲む菊の酒

村雀菊のさかりは高く飛び

芦の風小鳥もとまりあぐみけり

見も知らぬ人も訪ひ來る菊さかり

一年の秋をにぎつて菊かをり

たつ鳥もよぎて通るや芦の風

蝶も來て花の口吸ふ牡丹かな

手をふればとげに刺さるゝばらの花
やさしげに見えて針持つ薔薇の花
人の足止むる野菊のかをりかな
何よりも秋のほまれは菊の花
菊咲くや軒に雀も唄ひ出し
菊の苑今日も雀の訪ひ來り
芦の穂にとまる雀の輕さかな
菊ばかり花ではないぞにはすゞめ

○

吾庭の木犀に雀群がりてあしたの空の賑やかなるかな

白々と雀の糞は木犀の樹下に雪の如く落ちあり

二月十八日

於明光殿

朝七時起出で見れば明光殿うらゝかな日の窓にさし居り
和歌冠句卷數冊の奥書きて右手の指をばいためける哉
風強く月宮殿に吹きつけて今植ゑたての檜をゆする

花水氏の百日祭に莊月氏外數名の宗匠出でゆく

晝近く花明山文庫の箱書をなしにけるかな月明館にて

五大敎道院胡容覺氏より小照一枚贈り來れり

返禮に吾小照を北村氏に托し胡容覺氏に贈れり

夜に入りて明光殿に卷開きいと面白くつとめける哉

明光殿女宗匠代るゞ吟聲つとめて歡聲の湧く

海原の波に浮べる蓮華臺は世に伊都能賣の貴の寶船

昨年と御幾の作製面壁口出

二月十九日　於高天閣

くたびれしまゝに深更熟睡し眼覺せば午前の十時晴れ渡る空に太陽煌々と輝き初めて神苑ぬくし冠句卷二十册餘を書かされて頭も腕も重くなりけり月照山近侍伴ひ五六七塔の周りの垣を取りのぞきけり月清く照り渡りたる神苑をそゞろ歩めば春の心地す今日も亦月宮殿の寶座をば只一人にて登り見し哉

献勞者酉山檜を掘らんとて今日も穴太に立ち出でゝゆく

○

產土の神をあがむる三五の道うとんずる破れ神主

國魂の石を集めて月の宮の寶座の露に輝く月哉

澄切りし今宵の月の美はしさ瑞の御魂の鏡とぞ思ふ

月冴ゆる今宵の空に風もなく暖かなりけり神苑の高臺

ぬきさしのならぬとこまで詰りたる世を開かんと伊都能賣の神

吹雪する公孫樹の下に佇みて花咲く春の惠をぞ知る

村々の夕べの煙棚引きてうすれたる月空にかゝれり

○

雪はまだ愛宕の峰に殘りつゝ南桑の野にかげろふのたつ

類例も無き石宮の清庭に酉山檜今日も植ゑつゝ

○

麗しき神苑の景色見し眼には嵐の山もうとまるゝかな

繪卷物くりひろげたる如くなり天恩郷の月夜の景色は

景色よき天恩郷を後にして道の御爲鹿島立する

千年の松の梢に月澄みて夜日麗しき天恩の郷

○

天恩郷月輝きて櫟生の下あり〳〵と見ゆる夜半哉

眠らんと眼閉づれば諸々の思ひ起りてなほもねられず

樣々に國の行く先偲びつゝ吾責任の大なるを知る

嵐にも微軀とも爲さず石の宮

珍らしく都大路に雪降りぬ越路の空の偲ばるゝ今朝

黄塵の都の巷も白銀の雪珍しく積る朝かな

花明山の神苑の木々につむ雪を花と眺めて神言を宣る

神苑の木立の梢に花咲きて月の高臺雪に明け行く

自動車の通へるあとのいちじるく雪に殘れる神苑の曙

雅男は花と見れども山里は往來になやむ朝明けの雪

大井川流殘して南桑の野は白妙の雪に埋まる

西口の屑屋の庭もつむ雪に一と日二た日は清まりにけり

南桑の野にも漸く冬の來て花明山高臺今日も吹雪す

月の宮につむ白雪のかくまでの眺め知らずて夜を明しけり

野も山も一夜の内に音もなくゆめしろがねの世とはなりけり

なんとなく襟正されぬ月の宮瑞月門より拜む刹那は

二月二十日　於高天閣

麗かな陽は神苑に刺し初めて明光殿の朝あたゝかし

和歌の選冠句の卷等書き記し明光殿に半日を送る

肥取りが又猫小猫二三頭引張つて來た南の方から

自動車を雇ひて穴太の西山に檜掘らんと近侍子と行く

齋藤氏館に入りて夕飯を一行五人よばれけるかな

故郷の愛宕の山の頂上より家並見ればいたく變れり

藁屋根の多く並びし我村も瓦の家のいたくふえたり

小學校時代に戰ごつこせし愛宕の山に松の樹茂れり

算木山に遮られつゝ花明山の高臺見えぬ愛宕山の上へ

愛宕山麓を流る小幡川は流水涸れて川底白し

住き人と蔵を刈りて遊びたる境の山を見ればなつかし
古の竹馬の友は皆老いて顔黒々と皺波の寄す
吾友は大方冥途に旅立ちて殘るは僅三四人のみ
殘りたる友は何れも年老いて田舍親爺の見るかげもなし
吾一人皇大神の御恵みに身も健かに心も若し
同年の友の老いたる姿見て吾も斯くやとかへり見しかな
二つ三つ吾より若き友垣もいたく老いたり情無きまで
吾よりも若かりし友の老いたるを眺めて神の厚恩を知る

村人は吾姿見て何時までも若き姿と怪しみにけり
去年の春求めし山は惟神神苑の植木のあるぞ尊き
故郷に錦を飾る身となりて歸る吾身の幸多きかな
吾知己は次第々々に失せゆきて知らぬ若者多くなりけり
榮えたる家は衰へおとろへし家は榮えて世の態示せり
吾身をば虐げ惱めし人々は早くも土中の者となりける
弟より十年以上若く見ゆと村人達のあきれ居たりき
八十の坂を越えたる吾母の健かさ見て神に感謝す

玉の井の宮の敷地を檢べんと村の彼地此地巡り見しかな
大本の山に到れば吾母はいとまめやかに薪樵り居り
花明山の神苑に植うる大檜五株六株掘り立てゝありぬ
次々に昔の吾の浮かび來て或は笑ひ或は怒る
留守中に長峰某氏訪ひ來り歸りしあとに吾歸り來ぬ
愛善會基本歌一首口述し北村宣使書き止めてゆく
山行きに身も魂も草臥れて前後も知らず寢過しにけり

◇二月二十日　中外日報記事

躍進する大本教

大本教ではその運動が最近に到つて全く調子をかへて內外に向つてその地歩を占めて居るが、最近表面立つた著しい諸點をあげると左のやうなものである。

○別院と分院の建設—支部の擴張

この一兩年の間に變つたそれは別院の建設で、既設では熊本の九州、鳥取の神劔、愛知の東海、北海道山部の北海道各別院が出來、京阪で一時大騒した信貴山上の別院とあやめケ池の別院は正式には未だ實現はしない。尙ほこの他に分院といふのを建設することにつとめて居るが、これはホンの今年に

入つてからの制度で新潟縣寺泊の寺泊・栃木縣の東山、佐賀縣の三六分院や京都にも二篠に去る六日京都分院が新設されて開院式が擧げられ、和歌山のそれは昨十九日に開院式を擧げた。

○大本事件の本塩本宮山上の二つの建物

大正十年の大本事件で打ち壞された綾部本部の本宮山上には長生殿と寧天閣といふ二大建物が工事に着手された。

○亀岡本部の設備

王仁氏の出生地の京都府下南桑田郡穴太に玉ノ井といふ神苑を造ることが二月四日の全國支部長會議で決した。

△宣傳本部たるこの亀岡本部では大印刷所を建てることになつた。大体建物は鐵筋コンクリート三階で大輪轉機を目下購入交渉中である。尙ほこゝに本

部をおく人類愛善會には梅田前代議士と栗原白嶺氏とが躍氣となつて居る。

△桂公の愛妾お鯉さんが最近大本に出入して居ることは注目されて居るが、某政治家のお使ひだともいはれて居る。

宗團法と大本

至極呑氣な態度

大本教では今度の宗教團體法に對してどう對策をもつかといふことは、何しても自ら我が教は宗教團體でないといふ立場で居る點から注目され、ことにこの從來の立場は宗團法の實施のあかつきはとれぬものと認められる事實上の事もあり、旁々注目されて居るが、その幹部の人に就いて聞いて見ると『大體大本には大本の立場があつて所謂宗教の團體ではないが、その政府の大本に取る態度に依つて決するより他はない。別に法律專門の信者もあるが

この宗團法の爲に大本の精神が壞される譯合のものでないと判定して居るし内部では何等心配もなにもして居らぬ』と至極泰平な事を云つて居るが、要は其法規上の取締られ次第といふ立場で往年の肩肱張つての事はないらしい

◇同日　京都日出新聞記事

大本教の出口から金一萬圓を騙取

その金を高利に貸付ける

恐喝スリの前科者

京都市河原町四條上る東入る山本格之助(四〇)は窃盗前科一犯、詐欺前科一犯を有する强たか者であるが、昨年十二月末から自宅附近に出來た湯屋鈴

木駒次郎方に至り『自宅の地下に埋沒してある下水溝に風呂の汚水が通じて衞生上困るがどうしてくれる』と居直り脅迫して二百圓を捲きあげた外、大正十二年十月頃自己の亡父が格太郎と稱し、當地で相當な顏役であつたが、死亡後今度十年祭の追悼角力をやると詐稱し、支度料と稱して一萬圓をセシメんものと、父の知人の例の大本教の大立物出口王仁三郎氏を言葉巧に、木屋町の某料亭に呼び出し、該金を騙取し、之を高利に他人に貸しつけ、夫婦が贅澤な生活をしてゐることを、府刑事課が探知し、この程檢擧取調べの末近く身柄は京都地方裁判所檢事局へ送られることゝなつたが、同人は一昨年末には掏摸犯人として中立賣署に檢擧されたこともあると。

二月二十一日　於高天閣

高天閣風凪ぎ渡り暖かく朝日うらゝに春心地せり

東京ゆ小久江成子氏朝八時或件につき訪ね來たれり

八重野子は小久江氏共に京都に何か買はんと急ぎ出でゆく

大町氏藤坂博氏伴ひて高天閣に吾を訪ひけり

古曾部なる山林の件落着し村人代表挨拶に來る

伊賀とら氏建築したる龜年館に色々道具持ち運びけり

午後よりは伊賀氏と共に龜年館に入りて暫く憩ひにけり

今日も亦西山檜一株を植ゑつけにけり月宮高臺

午後十時明光殿を訪へば電燈消えて靜なりけり

日出鷹ゆ臺灣嘉義に安着の飛電來りぬ正午過ぎ頃

龜年館櫟の林隔てつゝ見る高天閣の灯の冴え

◇二月二十一日　大阪朝日新聞記事

王仁三郎から一萬圓詐取

京都の恐喝犯人

京都市河原町四條下る東へ入る山本格之助(四〇)は昨年十二月末近所の鈴木駒次郎が湯屋『あかし湯』を開業したゝめ、自家の下水溝に汚水が流れ込んで健康を害するとて恐喝して金二百圓を捲上げたことを京都府刑事課が探知して取調べたところ、同人は大正十二年一月のこと亡父格太郎が大本教の出口王仁三郎氏と知合だつたのを奇貨とし亡父格太郎の十年祭追善相撲の費金と欺して王仁三郎氏より百圓札百枚を出金せしめて、これで贅澤な暮しをしてゐたこと發覺、二十一日一件書類とゝもに京都檢事局に送られることになつた。

二月廿二日　於高天閣

有明の月はみ空に冴え渡り風靜かなり花明山高臺
停車場に白煙はきて入り來る朝の汽車の長くもあるかな

湯に入りて安全剃刀使ひ終り歸れば高天閣に人待つ
ひきもきらず午後の五時まで忙客の絶間もあらず忙しき今日
今日も亦西山檜三株まで月の御苑に植ゑつけにけり
夕飯を濟せて龜年館に入り月並の和歌選みけるかな
月冴ゆる神苑内をひろひつゝ明光殿に入りて憩らふ
高臺の銀杏の下に立寄れば冴えたる月の梢にかゝれり
木を植ゑし月のみにはの清しさに吾を忘れて見つめける哉
滿月が寫眞の機械買ひ求め黄昏京より歸り來れり

間責案通過したりと東より飛電來れりたそがれの空に

二月廿三日　於高天閣

何となく吹き來る風も暖かに龜山高臺春氣たゞよふ
見渡せば愛宕の山にうすがすみたな引き初めて暖かき苑
灰色の雪大空に徂徠して寶座の御樹に春風わたる

神苑をめぐりて見れば蓬の芽早青々と土を割り居り

昨日今日羽織一枚剝ぎ取りてなほ暖かく暮しよきかな

公園氏依頼によりて京都市の粟辻宛てゝ手紙書きたり

湯に入れば疲れし體ぐことなく骨やわらぎし思ひこそすれ

伊都能賣會和歌の選みを明光の文の御殿に終りけるかな

齋藤氏玉の井會の事につき天恩郷に上り來れり

北丹を巡遊したる玲月は今日にこゝと歸り來にけり

玉の井會の事に關して大國氏出雲路さして今宵出で行く

梅林氏重病につきわざ人を遣はしにけり祈願の爲にと

高臺に西山檜二本まで今日も植ゑたり献勞の手に

夕餉たく村の煙の細長く棚引き渡れりひくき野空に

月宮臺檜植ゑつけながむればこんもりとして深く見えけり

裸木の櫟林に春立ちて梢やうやく色つき初めたり

神苑をめぐりて見れば常磐木の松にも見ゆる春の色かな

十四夜の月眺めんと仰ぎ見る空灰色の雲のたゞよふ

一としきり吹き荒みたる北風もあとなくやみて靜かなる宵

滿月が求め來りし寫眞機を始めて吾は使ひ見しかな

別院の落成式の大寫眞今日井上氏持ち歸りけり

政界の狀をながめて何となく心安からぬ今日の一日

懲りずまに宗團法を提出し神や佛にたゝられにけり

○ 俳道

俳道は天地創判の以前から流れて居る。森羅萬象は悉皆俳的表現である。釋迦が女性醜と人間醜に中毒の結果はヒマラヤ山と云ふ小さい茶室に逃げ込んだ茶人であつた。「ソロモンの榮華も要らず百合の花」だの「陽炎や土にもの書く男あり」だのと發句つて居た耶蘇も或る意味に於ける俳僧師である。

天地は其儘にして茶室である、自然の詠嘆はその儘にして天國の福音である。然しクリスチャンに耶蘇が解らないやうに茶人は茶を知らず、俳人は俳道が分つて居ない。耶蘇教は露西亞も之を見限つて了つた。マホメット教も本場の土耳其に捨てられた。日本の神道も佛教も疾くの昔に國民から捨てられてゐるが、之を知らない者は神道家と佛の僧侶計りである。

凡ての人々は何れも皆宗教家である。否宗教が人を有つて居るのである。そして宗教に見放されて居るものは宗教家である。今日の俳人と稱するものも皆俳道から捨てられた俳亡者である。そして日本俳壇の中興は、戰國爭覇の頂点に對峙して旗鼓相衝つた模山、不識庵の連中であつた。信玄が城を有たず、誠信は甲冑を纏はなかつた。自分が入黨戰爭の際にも鉄鉢を持たなかつたそれは、所謂山川を城となしてゐるからであり、敵中を行く恰も無人の平野を行くが如くであつたからである。また彼の誠信は一生涯刀を拔かなかつた。大事な軍ほど人數を減らし、川中嶋で信玄に迫つた時は獨であつた。懇には連が邪魔になるが如く思つ

たのだ。信玄、謙信は相思、相愛の懇中の様な態度を有つて居た。戀と云ふものは殺したり殺される筈の物だからで、殺しもせず、殺されもしないものは戀では無い。信玄が死んだと聞いて茶碗を抛つて慟哭した謙信の心は可憐しい戀であつたのだ。「乾坤破壞の時如何」「紅爐一點雪」この兩者のラヴレターに徴しても彼等が自然に對する戀の深さを窺ふ事が出來る。「數行の過厯三更の月」これ彼等が全世界を手に入れたよりも勝つた法悦であつた。是俳道の猛者に俳すして何ぞやである。

それに彼の信玄の後裔だと云ふ武野紹鷗や紹鷗の弟子と云はるゝ千利休の如き俳人は、水呑百姓までが天下を奪はんと猛り狂つて居る眞只中に、落葉の響き霜の聲に耳を傾けて四疊半裡に大宇宙を包み、缺け茶碗に天地の幽寂を味つて、英雄の心事を憫んで居た。十里の長城否、土居を繞して帝都を復興し、聚樂邸を築いて花洛と共に花も月も己れ一人の所有となし、桃山城を建造して天下の美人を專擅し、驕奢と榮華に耽溺し陶醉した豐臣氏に、荒壁造

りの茅舍を見せ衒かして飛び付かせ、茶杓で丸木柱にフン縛つて了つた 利休は俳諧史上の逸品である。外面的には利休は終に豐公に殺されたが、內部的精神的から見れば豐公は 利休に殺されたのである。 時めく天下の關白が利休の爲に四疊半裡に引摺りとまれて以來の豐公は最早以前の豐公では無い。豐公は內部的に利休に殺されて英雄の分際から 只の凡愈に立還つて未見の世界が見られたのは小不幸中の大幸福だつたのである。 又利休は豐公に殺されたお蔭で永遠の生命を獲得したのであつた

この一舉兩得の中に有聲に無聲を見、無色に有色を聞く俳道の眞趣がある。 絲の掛け足らぬ琴に、有り餘る琴の音色を聞く程の人間で無ければ、俳道は到底分るものでは無い。

○茶　道

裏表四十八手を叩き折る隻手の聲の聞える人間で無ければ茶道の眞髓は分らない。 茶事は

即ち禪の具体化、俳味の生活化で、そこに俳茶一味の馨きが味へるのである。東漸して來た佛教が民族的體驗、人格的發揮によつて原形を破壞し、新しい生命を生み出したのであつて宗教であると共に藝術であり、又科學とも見られる。形の上から見て茶道と呼び、內容に聞いて俳味と稱ふが、究竟すれば同根で、日本文化の洗煉されたる紅白二種の色である。

維摩の方丈と月宮殿の寶座に大千世界を觀ずるの人は、四疊半裡の閑寂を破る風鐸の音に天地の父音母音を聞く人である。一句、一歌にして江山萬里を勞歸せしむる大詩客である。紹鷗や利休は一代の詩客であり、躬恒や、西行は一世の茶人である。大威神力は凡て孤寂の相に潛んで居るものだ。孤節瓢然として鳴立つ澤の秋の夕暮に寂寥を歌つた西行は、北面隨一の荒武者宗清であつたでは無かつたか。無言の言に〇〇を跳かした國師大燈は橋下塵上の流を枯木叫風と觀じたる乞食である。豊公が撥亂反正の深謀祕策も利休の四疊半から叩き出したと言ふのも不可思議ではない。東風一度び荒野を撫すれば千紫萬紅一時に匂へど、九旬

の春過ぐれば青一色で、只一月の天半にあつて然するのである。千億萬を知るよりも此究竟の一事に參徹すれば足る。水泳は鱗族と競ひ泳ぐ爲では無い。牛馬と騁馳してその健脚を誇つてはならぬ。

人世を茶化して一個半個を說得せんがために、茶を讃ぎつゝ御經の文句を書いて居た賣茶翁の行爲も餘り徹底したとは言へないが、死に臨んで先づ茶器を茶毘に附した風懷や十德幣間とは言へ「淨らけき布巾だにあらば茶は飲めるものに候」と茶器を勝ひ吳れと其藩主から送つて來た三百金に添へて返した利休の風流にも亦一顧の價値はあると思ふ。西行や、芭蕉の簑立相に提へられて其殘糟を啜るの徒や、達摩の不識や白隱の毒を喫するの輩や、道具好みに浮身をやつす成金茶客、皆形式に墮し言筌に弄ばれるの徒輩である。故に怎うして捨てる事が掴む事であり、亡びるは得たと思ふ刹那と氣注(きつか)うものぞ。樽尾の明惠が茶を造つて弟子に飲ましたのは千八百則の公案よりも一服の茶が正眼を開かしめたからである。榮西の

「興禪護國論」よりも「喫茶養生記」の方が禪味があるやうである。

反省一番眞の俳味を復活せんとして宗教家たる瑞月は、茶器を造り、茶道を奬勵し、俳句和歌、詩等を弘通し、花壇、温室等を開いて眞の宗教即ち俳道、茶道、藝術を專心唱導する所以である。

○

神苑の秋の王者や白紅菊

北海の果にもかをる野菊かな

二月廿四日　於高天閣

北の山はるかに見れば雪雲の白くかゝりて吹く風寒し

植ゑつけし西山檜に吹雪して梢をゆする風のさわがし

朝早く光照殿にゆきみれば安藤照子すでに來てをり

湯あがりのあと間もあらず足いたみ胸腹苦しく床に横たふ

吹く風は登々あらく高殿の窓叩きつゝ東南にゆく

内閣の倒壞風が吹きすざび物騒至極の春となりけり

莊月氏夫人わざ〳〵訪ひ來りしばらくにして辭し去りにけり
大和博士夫人伴ひ悠々と天恩郷を訪ひて歸れり
梅の花蕾はいまだ固けれどあたりを見れば春心地すも
櫟生の裸の林にむら〳〵と春は來りて陽はうらゝなり
すみきりし空照り渡る月かげに神苑の夜ののどかなるかな
十五夜の月はみ空にさえ渡り露の玉照る高殿の庭
盜人も說敎をする世の中に宣傳演說怠るべしやは
一世二世第三世と盜人の說敎をなす闇世なりけり

○

月冴ゆる神苑の夜は何となく心はるれど妹の戀しき
戀人の涙に似たり月の照る神苑の樹々の露のたまだれ
月の夜に月宮殿を眺むれば植木のかげに深く見えつゝ
猛獸の吠ゆるが如き風の音も明光殿は靜なりけり
風さへもよぎて通るかしとやけき美人のすめる明光の殿
神苑の雀でさへも明光の殿にはばゝて來りなかざり
雀より百舌鳥より雲雀四十雀よりも賑し明光殿かな
ほゝゑめる汝が面かげ日に殘り忘られぬまゝ夢に入りけり

すゞはりしやうな愛らしその眼もと吾生命をちゞめんとぞする

慰愛心人に授けて神樣はいたづらばかりなされますかな

○

自分は元來極貧の家庭に生れ世間の侮りを忍び恰も罪の子のやうな泣くにも泣けぬ悲しさと死ぬにも死ねぬ情けなさとに襲はれて涙の霧の中に微笑の河を潜り迷ひの宮にも似たる曲り迂ねつた危い路に行く手の望みを孕みつゝ、深默の丘を越え憂鬱の森を脱け自由の曠野を横斷して孤獨の山中に入る可く底干も知らぬ大きい闇の淵へ逆しまに落ち込んで行つた。狼虎獅子大蛇の吠え猛る犀に魂魄を冷やしては、國祖の救援を祈り、兎に代つて猛虎に肉身を拋け與へた佛の如く、無抵抗主義を採り、寂しさに和歌を詠み句を捻り 瑠璃にまぎらし、且つ將來永遠の生命を唯一の力と頼み、人生の果敢なさが身に泌みるやうな迷ひ心が起ると、

今尙萬人の心に活くる釋迦や基督や保羅の永生を心に蘇らせて、帆なきに帆走る船の如くに目に見えぬ何物否神の慈愛に引かされて、前へ〳〵と進んで來たのであつた。夜更けの靜寂を破る更に靜寂な鞦の犀に父の幻影を心に描き、音も無き水音に母の俤を胸に刻みつけた。一歩々々と遠ざかり行く父母信徒弟妹に心はいよ〳〵接觸して目に見えぬ光明の彼岸に對せんとする憧憬は目に見えるが消え失せて未來の天國は過去の夢から覺めて、疲るれば疲れる程愉悅の眸が光つて來るのであつた。斯くして一樹の蔭にも二宿せず、刹那々々を樂しみに積極的行動を續け今日に至つたのである。是も全く神の自分に降し給うた試錬であつたのである。

丹波霧深きが中に彷徨ひし吾今神の寶座に仕ふる

二月廿五日　於高天閣

いたづきの身をもたげつゝ窓の外すかせば吹雪はげしき朝かな

つかれをば癒さんとしてぶどう酒を求めて飲めば力づきけり

終日を吹雪はげしく吹きつけて寒さきびしき神苑の庭

今日も亦献勞者達西山に檜掘らんと立出でゝ行く

吾眼鏡出來上りしと京都より大和氏夫人贈り來せり

風清き天恩郷の朝夕に六合澄ます太祝詞かな

天地の百の神たち神集ひ神業助くる天恩郷かな

神も人も萬代不易の花明山の法城見れば心勇まむ

一入に深く崇高くなりにけり月の宮居に日の木添はりて

萬代に動かぬ誠の意志を以て築き固めたる月宮石殿

地震も荒風も水も火も雷も知らぬ顔なる月宮殿かな

安藤氏夜汽車を待ちて只一人東をさして歸り路につく

大空に月あり乍ら一面に雲ふさがりて暗き夜半かな

稲荷山電燈いよゝまたゝきて南桑平野に夜嵐の吹く

その昔英雄天下を握りたる花明山城趾に政界を視る

聖師様動靜知らせと臺灣の日出麿一行ゆ電信來れり

○時事をよむ

大伽藍吹きとびさうな嵐かな

殿様の鼻息荒し大吹雪

凩や嵐のかげに雀鳴き

手も足も冷えきれさうな吹雪かな

頭から足までふるふ吹雪かな

凩の藪かげに鳴く雀かな

凩に柿拾はんと餓鬼集ひ

蛸坊主ねぢ鉢巻の日比谷かな

蛸坊主日比谷ケ原で眼つり

歛味方心そぐはぬ同行かな

東の空にむら雲立ちにけり

中空に村雲ふんで月は照り

村雲は神風ならねば散らぬなり

神風に村雲散れば月は冴え

小夜嵐樓に心曳かれけり

二月廿六日　於高天閣

昨夕よりの風猶ほ止まず神苑に冷氣襲ひて靜心なし
稗田野の大石友吉翁來たり植樹献納申込まれき
午後よりは雲の扉を引きあけて天津日神苑を照らし玉へり
瑞孝尼外一人と訪ひ來たり高天閣に語りて歸れり
くれ〳〵やもろ〳〵數多たづね來ていたづきの吾忙しきかな
伊都能賣會和歌の卷書き數十枚景品色紙筆染めにけり

都合宜し來月中旬歸國すと日出麿電以て遙に報ぜり
今日も亦西山檜の本高殿の庭に植ゑたり黄昏の空

○

人生は天から降つたのか、それとも土から生れたのか、天から生れたものなら必ず天國へ昇り歸る筈だ、地から生れたものなら再び地底に墮ちて行くだらう。生れない前と、死んだ後は最早人間ではない。人間を論ずるならば人生で澤山だ。死なんが爲に生れたものは死んだがよい。寂滅爲樂の宗門の好きな人間なら誰にも遠慮は要らぬ、ドシ〳〵寂滅して樂と爲すがよい。アダム、イブを人間の祖先と信じ、祖先の罪を引つ被ぶることの好きな人間は自分を罪の子として何處までも謝罪し、一生を罪人で暮し、十字架を負うたがよい。又生きんが爲に生れたものは生きたがよい。神の分身分靈と信じ神の子神の宮と自分を信ずるものは

何處までも永遠無窮の生命を保ち天國に復活して 第二の自分の世界に華やかに活動するが良い。人間はどうせ裸体で生れて裸体の天國に復活するのだ。その間の人間の行路は中々面白いものだ。其所に人生の眞價が在るのだ。永遠に生きんとするには 第一に信仰の力がいる。その力は神に依れる力で最も强く、その言葉は大きくなくてはならぬ。人生に宗教のあるのは凡ての樹草に花の在るやうなものだ。花が咲いてそして立派な實がみのるのである。何れにしても信教は自由だ。意思想念の儘になる天地だ。天國に落つるも昇るも、地獄に樂しむも苦しむも、自ら罪人となつて歎ぶも泣くも意志の自由だ。人間は各自御勝手に宗教を選擇するが良い。夫れが所謂信教の自由と云ふものかも知れぬ。

○

天の不平は豪雨を降らして大洪水と爲し、風の不平は嵐を起し總てを破壞し、地の不平は地震を起して以て乾坤(けんこん)を震動せしむる樣にも思はれる。人間の不平は千樣萬態であるが、先

づ生活問題から起るのが多い樣だ。是れの不平を解決する唯一の方法は報恩謝德の意義を了解するにある。佛教では萬象は皆佛陀であると云ひ、大本では宇宙に於ける 靈力体一切の萬有は神の本体であると說く。然り吾等が極暑と闘つた後の一滴の水は如何に多大なる感謝の念を與へるか。風も草も木も總て吾人に幸福を與へて居る。米一粒が八十八回の勞力を要して始めて人間の口に入る事に思ひを致す時は、吾人は四圍の總てに對して感謝せねばならぬ報恩の念は吾人に幸福な人生の溫情を敎へてくれる。一個の日用品を買ふものは其品物にて便宜を得る。賣主は代價の金で自己の慾望を滿足する事が出來、製造人は勞銀にて自己の生活必需品を求むる事が出來るのだ。然りとするならば以上の三者は何れも對者に對して感謝せねばならんことになる。近時八釜敷い勞働問題にても然りである。經營者は天然と勞働者に對して感謝すべく勞働に對しても相當に利得の分配を爲すべきは當然である。と 同時に天然否神々の德に對して感謝すべきである。又勞働者は經營者が在つてこそ、自己が生活し得

る事を知つて唯自己の腕力萬能心に囚はれず、そこに感謝の意を表はすべきものである。此の如くにして兩者が互に諒解し始めて不平不滿を去り溫い生存を續くる事が出來る。然るに現代には感謝報恩の念慮なき利益・点張りの人間がまゝあるのは歎かはしい。兵庫あたりの某紡績工場の近隣に火災が起つた時に多大の綿花が倉庫に在つたので職工連が萬一を氣遣つてどん〳〵と他所へ運び出して居た。そこへ幹部の役員が出て來て此の狀を見るなり火の如うになつて叱りつけた。そしてこの綿花には十萬圓の保險が附けてあるから他へ運ぶ必要は無い。燒けても原價に該當するだけの保險金が取れる。運搬すれば夫れだけの勞金が要る。いらぬ世話を燒くな、といつたとの事であるが、此の役員どもは怎うして此の綿花が出來たかと云ふ事を知らぬ冥加知らずである。そして多數者の勞力を反古にするものである。代價の金さへあれば會社の損失はないにしても勞力の貴い事と天下の損失を知らぬ利己主義の人間である。猶この綿花を燒失したなら多くの人々が寒さを防ぐ衣類が出來なくなるといふ社

會の人の幸福を度外視したる惡魔の所爲である。滔々たる天下殆んど是に類する人々の多きは洪嘆すべきである。天地の大恩自然界の殊恩を知らず宗教心なき人間は總て斯の如き者である。青砥藤綱は滑川に一錢の金を落し五十錢の日當を與へて川底を探らしめたと云ふ。斯くの如きは天下の寶を將來に失ふ事を恐れた謝恩心に外ならないのである。吾人は何處までも青砥藤綱の心事を學ばねばならぬ。

○

忍耐の川横ぎつて花明ケ岡
沈默の峠をこして花に醉ひ
憂愁の淵を浮き出て花明ケ岡
花と花中に言葉の花を選り
木枯もよぎて過ぎなむ月の宮

ひとり寢の夢破れけり小夜嵐

くれ〳〵はひるもあしたも迫るなり

ものを云ふ花は四季ともかをるなり

花の蜜すふ唇も尻に針

樹を植ゑて一入ふかし月の宮

松虫も吟聲清し秋の月。

前栽に物の蔭あり月さえて

月さゆる夜半神苑をひろひけり

月の庭物云ふ花の淸さかな

吹雪して御空の月はかくれけり

ものを云ふ花には風も力なし

樹を植ゑて二度三たび庭ながめ

チャームする美人はめぐし憎らしき

夜嵐も聲に情あり春の庭

○

古今東西の凡ての宗教を調ぶれば何れも女神が加味されて發達を遂げた如うである。表面に天の父を本尊として神の子を拜する耶蘇教も世界的宗教となるには、天父と子と聖靈とでは行かなかつた。神の子の外に聖母マリヤが天后人母として崇められ、之に祈禱を献げ人類最深の要求が充されたからである。佛教に於ても釋迦崇拜が觀音崇拜と變じなかつたならば今日の如く東洋の宗教とは成らなかつたであらうと思ふ。

○

世の中に女てふものあらざれば冬の如くに冷たかるらむ

○

詩を作らうと思ふ心が詩を殺し、畫を描かうと思ふ心が畫を殺すものである。無作の詩人と無垢の畫人こそ、眞に詩人であり畫伯である。海の麗山の姿も神ながらにして詩となり畫となるのが本物である。

○

怒罵と悲鳴とが魂の長さと幅である以上は幅の分らぬ人間こそ眞の人間であり、神の子である。

人の面貌は心の索引であつて、人の性格と經歷の說明圖である。實に圓滿な無邪氣な顏の所有者なれば如何に多辯な人間も、相對して居ると物を云ふ事を忘れしめられるにも拘はらず却て總てを語り得たやうな滿足を感ぜしめらるゝものである。

○

僞善のマスクを被つて聖人振り世を欺く奴ほど氣障なものは無い。その人の分身たる小兒がやがて不良性を發揮してその僞善のマスクを引つ剝ぐものである。子は未生以前の親……謂はゞ生命の親であつて、人は其子に依つて親たり得るのである。子は親を生まんが爲に否不俱戴天の仇敵同志を地獄の劫火も燒く能はざる慈愛のきづなに繫いで親子たらしめんが爲に世界の兩極に懸けはなれた男子と女子を天上の光明をも遮斷する性慾の鎖で縛り付けられる。

○

自分の過去を深夜靜に省ると一代の大失敗は大正日々新聞社の買收と經營について何れも素人連に任かせ切つた事であつた。然し乍ら今日に成つて考へて見るとそれは神樣が大なる御經綸の一部であり、大本に取つて大發展の曙光を發揮する唯一の豫備條件たる極めて小さい不幸に外ならなかつたのである。世の中の凡ての事は皆さうである。末法だ濁劫だ亂世だ

惡世だと拗ねたり恨んだり怒つたり泣いたり喚いたりしてゐるが、そうした人は何時の世に出て來てもそうした人である。自分は大正日日の負債 數十萬圓の請求に攻め付けられた際も平然として第二の經劃に取り掛り天恩郷を築き上げた。入蒙の際敵の陣中に進入し死刑場に引き出された時も余りに心配にも成らなかつた。何事も一切を神に任せ切つてゐたからである。凡て此の世を呪ふやうな人間には決して天國も淨土も在るべき筈がない。我々の踏み出す 歩一歩のその刹那に永遠無窮の世界が含まれて居るからだ。如何なる難關が押寄せて來ようとも神に在る身はいつも圓滿で安樂で平氣である。恐ろしく思はれるのはその恐ろしさに勝つた有難さの龍つて居る証據である。一晝夜の間にも夜明けもあれば日沒もある。一年の間にも春夏秋冬がある。夜明け計りが幸福で日沒が不幸とも限らない。晝は元より結構であるが夜も亦馴染んで見ると慕く無いものである。

○

白隱禪師が一日法華經を誦んで内客空虛、たゞお伽話の一種として投げ棄て無かつたなれば、一生法華經を信ずる時機は來なかつたであらう。自分だつて其の通りだ。敎祖のお筆先に對して穴だらけだと云つて一旦之を捨て官幣社の神職に成らなかつたら、お筆先の眞の光明が分らない、五里霧中に彷徨しその取捨に迷つて一生を送つたかも知れない。之から考へても捨てるといふ事は正しく掴む事であらねばならぬ。最も大事なものは何によらず一旦拋たなければより以上の大なるものは得られない。深い惱みが無限の慰藉を齎らし、寂しさを外にして慰めは無く、悲みを厭うて喜びは來らぬ。貧乏したお蔭で壯健に成り、長命するものも澤山にある。

○

人間は幽界から現界へアク抜きの爲に送られて來たものだとの說を眞なりとするならば そのアク（惡）さへ拔けたら幽界又は神界へ引き取られる筈だから何 時までも長生して居る人

間はアク抜けがせない爲めに壯健なのだと思つたら 吾ながら吾身が淺間敷くなつて來るだらう。併し乍ら人間は決して現界へアク抜きの爲に生れて來たのではない。 神が天地經綸の司宰者又は使用者として現世へ出したものである以上は一日も長く生きて一事にても多く神の御用を勤めねば成らぬものである。朝夕の天津祝詞や神言は その日〳〵の罪咎過ちを祓ひ清めて天來その儘の神の子神の宮として神界に 奉仕すると共に現界に於ても人間生存上大々的活動すべきものである。

○

五日一水、十日一石といふが、三年一文、一生一言と云つて一言に 萬行を含むものは神の生宮であり、眞の豫言者であり、雄辯家である。萬卷の書を腹に詰め込んだ 紙虫學者の多くは一事に貧しい者である。又萬言をたゞぬる人間は一行を修め得ぬ人間にきまつてゐる。全体文字を書いたり、文句を捻ね繰るやうな人間や、口の達者な人間に恐ろしいものは無い。

思つた事を書いて了ひ 又言つて了へば頭腦が空虛になるからだ。實に安全な代物である。そこに如何なる表現も自己をかくさずには措かない。その言葉が眞實を裏返へすのも 不思議ではない、啞は素より啞であるが、眞實を語つても一度口から外へ出したら、 それはモウ眞實そのものでは無く眞實の影である。平假字を七字づゝに切つて、いろはにほへと、ちりぬるをわか、よたれそつねな、らむうゐのおく、やまけふこえて、あさきゆめみし、ゑひもせす、の「す」を加へた 圓點の『とかなくてしす』といつたのは 赤穗四十七義士 に對する徂徠の評語であるといふのは「いろは」を弘法の作だと云ふにも勝つた 大啞であるが「說かなくて死す」は「咎無くて死す」たる事は當然だ。 說きさへしなければ咎は無いからである。併し言葉は要もぬと言ふことすらが言葉で無いと言へない。 文字無用論も亦文字によらねば書く事が能きぬ。 實行の默鳥は言文の翼によらねば飛びさうにもないが、一管の笛で衆生も濟度さるれば、一篇の民謠に國の興亡を覺られる。邵康節は杜鵑の一聲に 宋の顚覆を直覺したと

いふ。歌ふか、默するか、此の二つの間に一寸でも理窟がはさかると地獄に墮ちる。「點指無聲」の達磨と唯記彌陀本願の羅什は異体同心ではないか、それに歌へども踊らずといふけれども、現代人は唄はなければ踊らない、己が腹から湧くのでは無いからである。踊らずに居れなくなつて踊るのでは無いからである。作れども知らず、それでこそ眞の作物と言ふべきである。人間が意識してやる事に碌なものは無い。人爲とは破壞の別名である。作らしめられた物のみが生きてゐるのである。斯う考へて見ると現代は破壞の多い時節であると思ふ。人間は子供を造り得ない癖に子供を精神的又は形体的に殺すものが多い、自分から子供の精神を殺して置きながら其の罪を何ものにか塗りつける者ばかりになつた現代である。

○

月宮殿庭に日の木を植込めば御前いみじく崇高さの增す

珍らしく高天閣に嫁ケ君騷ぎ出したり奥の間天井

二月廿七日　於高天閣

薄煙立つかと見れば霞にて向つ山の邊斑に陽の刺す

高天閣南の障子開け放ち見る目さやけく遠山かすめり

献勞者數多集り高臺に今日も植ゑたり松と檜を

月宮殿前にレンズを相向けて晴れたる空に小照を撮る
乳母車把手握り西山の木攀り見んとて立ち出で、行く
坊主山頂きに立ち滿月は曾我部の原野をレンズに納めし
愛宕山坊主山の上傳ひつゝ思ひ出の山指して出で行く
小松林中に火を焚き飯食へば腹の虫奴がグウ〳〵となく
齋藤氏館に夕べ立寄りて今日も敷地の話進めし
黄昏れて天恩郷に歸り見れば空暗くして風靜かなり
伊都能賣會和歌の開卷黄昏れて明光殿に行ひにけり

金鈴を振れるが如き美聲にて恥らひながら閑月歌よむ
吟聲臺に歌よみて行く吟月は迦陵頻伽の聲に似しかな
あつさりと吟聲臺に聲ふるふ美人の姿に涎繰るあり
花明山に名高きものは明光社美人宗匠の吟聲なりけり
樣々の思想を自由にしるしたる歌に心のうごき初めたり
高らかに聲張りあげて歌をよむ言靈遠く響き來るかな
なよ竹の節も素直に歌をよむ美人の聲のさわやかなるかな
春めきて明光殿の卷開き人の心も華やかなりけり

卷開き集へる人の面ざしは天津御國の天人に似し
退はれて大海原を彷徨ひし歌の御祖の仰がるゝかな
樂さうに見えて苦しき吟聲の汗は明光殿に光れり
吾妹子が活動を見に行たあとで美人宗匠の吟聲聞きたり

二月廿八日　於高天閣

朝の空雲一面に塞がりて小雨そぼ〳〵降り出だしけり
今日も亦西山檜の木運ばんと牛車以て穴太に出で行く
正午頃雨はいよ〳〵強くなり雨垂れの音殊更高し
穴太より上田和一氏入り來たり地所の代金二桃持ち行く
近侍子と高天閣に調べ物なして一日を送りけるかな
午後の五時西山檜の木献勞者牛車にて曳き歸りけり

黄昏れて高天閣に吾あれば光延二つの桃借りて行く

夕さりて雨は止めども空暗く登りなやみぬ東の石段

齋藤氏夫人と撮りし山中の小照漸く出來上りけり

嵐和ぎ春雨止みて夜深み高天閣の靜寂なるかな

○

吾曾て震昇に或夜誘はれて幻怪なる夢魔の世界に入つた。その時自分は無劫の寂寥と恐怖に襲はれた。右も左も眞の闇で面前も背後も咫尺を辨ぜざる許りの暗黒裡に落ち込んだ。そして何んとなく寒さを感じ戰慄止まずして非常に怖ろしい。頭の頂邊から脚の爪先まで吾神經は針の如うに尖つてゐる。闇の中から黒い翼を擴げて默々として迫り來る凄まじい物の息

が感じる。慥に何物かが迫つて來る。地震雷火事親爺よりも海嘯よりも噴火よりも恐ろしい怪物が虚空を壓し、大地を踏み躙つて今にも吾身心に迫り來るかの如くに思はれて、大蛇に睨まれた鮭猫に魅入られた鼠の如うに自分の身体は微動とも能きない。果然、眞蒼な劍の如き光が闇を劈いて吾目を射貫した。その光は次第にメラ〳〵と周圍に燃え擴がり、八方に飛び散らがつて狂ひ初めた。さながら光の亂舞、火焔の活動で何んとも形容の出來ない厭らしさであつた。そして此の物凄い火焔の海に蒼白い横目の釣つた鬼と赤黒い巖の如うな鬼とが、灰紫に煮えくりかへる泥の中に絡み合ひ縺れ合つて居る。やがて其の鬼が一つになつて振り廻はされる火龍の樣に火焔の螺旋を描きつゝ、幾千台の飛行機が低空飛行をやつてゐるやうな巨大な音を轟ろかせながら天上目がけて昇つて行くその幻怪さ、實に奇觀であつた。闇暗の空は忽ちその邪鬼を呑んで了つたが、やがて大きな眞紅な口を開けて美くしい金色の星を吐き出した。一つ二つ三つ五つと百千億と刻々數を增す金色の星は降るわ〳〵始めは霰の

やうに、雨の如うに、果ては大飛瀑のやうに降つて來る。しかし 其の星瀑の流るゝ大地はと見れば、白いとも白い凝視すると一面の白骨で自分も既に白骨を踏んで居る。何方向いても髑髏の山、散亂したる手や足の骨からは 蒼白い焰がめろ〳〵と燃えに燃えて、何んとも云へぬ臭氣が紛々として鼻を衝くのであつた。 自分は斯んな幻怪なる世界から一刻も早く脱れ出でんと一生懸命に走り出した。足首が千切れる斗りに突走つた。 併し乍ら駈けても〳〵白骨の曠野は際限が無く疲れ切つて思はず打倒れたが 忽ち深い〳〵渓河へ眞逆様に落ち込んだ。河水は悉く腥臭い血であつた。自分は逆捲く血の波に翻弄されつゝ河下へ〳〵と流されて正氣を喪つて了つた。その瞬間何物かに强たか五體を殴り付けられて我に復つたが 雲衝く許りの一大摩天樓が頭上に聳え立つて居るのであつた。 そして自分は其の門柱に衝突した途端に助かつた樣な心持になつた。自分は覺えず其樓へ飛び込んで、 矢庭に玄關へ驅け上つた。すると目眩しいばかりの電燈否な神の大燈が、恐怖に閉されて居た自分の魂の渓間を皎々と

照らし居るのであつた。 吁々過去數十年の自分の幻影はこの恐ろしかつた夢の繪卷物となつて今猶時々自分の魂に刺撃を與へたり鞭韃を加へて來れる。 吁々惟神寒幸倍坐世。

○

「堪忍のなる堪忍は誰もする 成らぬ堪忍するが堪忍」と忍の德を賞讃したものであつた。自分も 幼時は能く兩親たちから 言ひ聞かされたものである。併し 堪忍と言ふ事は佛敎で云ふ持戒忍辱の意味をはき違へたのであらう。厭でも我慢すると云ふのでは本當に戒を持つたものではない。その內心に苦と云ふものが在つては 得度は出來ぬと同時に心的衛生には叶はない。お腹が空いても飢じうないと我慢する、頭を打たれても我慢する、妻君が 姦通しても我慢する、飢死しても我慢する、堪忍するが堪忍だと云つて年中苦しい腹を抱へて 蒼い顏をして居ると、腹の中に不平の塊が出來る譯だ。陶宮の道歌に

堪忍の和合はほんの上直し、眞の和合は打ち明かす腹

と云ふことがある。昔から堪忍と云ふことを道德修養の一つと世間では思つて居るが、是は余り感心した修養法では無い。殊に古來用ゐられた堪忍なる語は 强者の弱者に對する敎へであつて、 弱者の不滿不平に對し常に此の肇法を以て事勿れ主義をとらしめて來たものだ。强者は一向に堪忍する處無く 弱者にのみ堪忍しろと敎へて來たのであつた。人間を卑屈に陷らしめ、無氣力ならしめたのもこの堪忍の二字の中毒であつた。 從來の所謂道德なるものには此の種のものが甚だ多いのである。 金光敎祖が頭上から小便を放りかけられて「溫いお湯りさまが降つた」と云つたと稱してその敎師等は 非常に敎祖の堪忍力を崇敬して居るが、是は大變な誤りで忍耐と卑屈とを混同した弱者の道德である。バイブルに「人若し汝の左の頰を打たば、右の頰も亦突き出して之を打たしめよ」と 示して居るのも今日より見れば否、自分の眼から見れば大變な間違で、無氣力を凡ての 人間に敎へたものと思ふのである。自分は飽くまでも此の如き堪忍說を採らず、力のあらん限り抵抗を續けて來た。そして祖神の任さ

し玉へる神業にはつ〳〵作ら奉仕しつゝ來たのである。

三月一日　於高天閣

よべの雨降り止みたれど大空に灰白の雲ふさがる朝かな

健康を祝するためと仙臺ゆ七面鳥の肉贈り來りぬ

山陰に出張したる大國氏四邊光らして歸り來にけり

瑞月門その右側に晨より檜の木植ゑんと勵む信徒

何處となく暖かにして風も無く靜かに小鳥囀る神苑

○

太陽の照臨、陰陽の輝き正邪淸濁の別無き雨水の沛然として臻り、普く萬物を潤ほし、空氣の宇宙に充滿して新陳代謝を行ひ、四季の風光妙にして吾人に壯快の氣を起さしめ、花卉の美、果實の豊かなる吾人に絶大なる快感爽味を與へ、豊富なる生動物の恩澤の大なる維れ一に天地神命の恩顧にして何れも大本大神の賚と云ふ可し。

一夜の風一刻の雨能く天下を風靡し山海を覆へし忽にして復舊さる。雷鳴の轟々たる後白雨沛然として臻り、大空晴々として天日の暉き渡る敏電火の過ぐるが如き急速の變轉、是皆神明の力の一部分の表現なり。自然界の目に見るもの耳に聞くもの身に觸るゝもの五感悉く

深趣遠大快活ならざるはなし。

神は天を造り地を築き人を生み山川草木を生じ萬有を配布して神代を永遠に建設すべくその蘊蓄せる無限の巧技と資源とを傾け吾人に不斷の恩惠を給ふのである。

神の大仁大慈にして天工の完備せる到底人工的一小僞の活動より成し得ざるを見れば、人は神の子神の宮天地經綸の司宰といふの言、聊か僭越至極の感に打たれる。到底天業神事の補佐たらんとせば此の天惠美の安澤に神恩を禮讃し、神の造られし萬物を賞翫すべきであるにも拘はらず、妄りに天設を毀損し些末なる人工美僞に耽る可きではない。

○

人間は死期幸なれば永遠に天津御國に蘇生るなり

人間は日常神の恩を謝しその行ひを正しくすべし

恐慌の來りし時に安々と過ぐるは必要準備の功なる
世の中は神のまに〳〵進みなば千里の外も危ふき事なし
最小の惡と雖も省みずば遂には思はぬ大難招かむ
人の家の門を潜れば其の家の興亡自然に判るものなり
何事もその大略を見て進む人にしあれば成績擧らむ
信仰の異なる者と同居する人程不幸の者は無からん
家内中一致同心なき時は團欒の樂永久に來らず
吾身より高きに接して遠慮する人は怠ち脚元見ちるゝ
身勞は壯健なれど小擧なり不健と云へど心勞は大擧なり

一切の物を大事にするといふ心は愛の本源なりけり
職業に由りて人々閑忙の時期のありせば心得べきなり
忙がしき人を訪問する時は簡單明瞭時間を節せよ
一日の業務は朝に考へて終日横目も振らず働け
今の世は正義の假面被りつゝ私慾を計る曲ばかりなる
大なる世界の害を除く可く神に習ひて勵め信徒
榮譽心深きがために自賣的戲曲の傀士となるぞ忌々しき
理解なき人は不德を敢てなし誠の神に反くものなり
生前に死後の備への無き人は死期迫る時無限の悔あり

艱難の大なる後は幸福の惠みの花の大なるが咲く
一度は非理にも盲從爲さゞれば夜光の寶玉手に入らぬなり
日々に踏みし實地の經驗は學說よりも遙に尊とし
小人に權威をしばし與ふれば忽ち威張りて世を亂すなり
生物を居らぬ人は夏の夜も毒虫襲ひ來たる事無し
愚狂なる人は萬事に注意力缺乏したる別名なりけり
昨日せし事の今日忌まるゝは御魂の進歩の力なりけり
獨り立つ身にしあらねば何事を主張するとも如何に立つべき
信仰の無き親戚は萬一の時財產に害を加ふる

不具者をば愛撫せざれば神の子と生れし人にあらずとこそしれ
何事も掠めて取るは良策にあらず與ふる人に幸あり
神のため世のため道のおん爲に働らく人は能く遊ぶなり
千思萬考未だ盡ざる其際は難局に立つ人にぞありける
種々の妨げ惱みあればこそ眞の天祐降り來たるなり
汚しと雖も貰ひに來るものに與ふる時は禍となる
世の中に多大の批評を受くる身は大人格のみ獨り味はふ
世の人は皆加害者よ吾一人被害者なれば過つことなし
平常に誤魔化しのみをする人は遂に世間の爪彈を食ふ

何事にも堅き肝銘なきものは天地の殊恩知らぬ痴れ者
他動的に自動續くる人々は怯愚の限りを盡すものなり
思ひ切り見切るを知らぬ人々は神の惠みに知らず離るゝ
一切の事は正面より見ずに反面より見よ必ず蔭あり
世の中の不熟の平和は惡鼠の盛裝したる化身なりけり
表面は小さく見えて內容の大なるものは必ず榮えむ
放埒の如くに見えて一切に規順あるこそ神の眞道
恒心の無き人々は平素より珍奇を好み喜怒の度深し
人は皆自信を發揮せざりせば大なる敵の襲ひ來らむ

人間に邪曲のあるは造化力巧妙過ぎしと悔ます大神
食物に乏しき時は健康の都に到る道に近けし
世の中は凡てを神に相任かせ注意せざれば災身に受く
親密な中にも男女の交際は區別あるこそ安全なりけり
顏の面眉目覩かれ耻ぢざるは破廉耻漢の正體なりけり
英雄の色を好むは世を思ふその熱情の燃ゆるためなり
諒解は人生に取り偉大なる信用なれば心配れよ
艱難の重なる度に自己愛の私慾の念慮薄らぎ去るなり。
人間の自己の力を知悉して進退すれば過つことなし

理想的人の少なき世の中は不徹底なる宗教に迷ふ
靜けさも閑に入らずば天地の神に通ずる考察力なし
疑ひの的となるべき物事に關係せざる神を知る身は
群衆は勢ひに乘り諒解の無きまゝ大事を決議するなり
我以上偉大の人に交はれば人格とみに向上するなり
世の中に不羈獨立の身なりせば居宅の如きは不用とぞなる
熱心と熱中心と熱狂は信仰上に大區別あり
久方の天津御神の御心にかなふは眞の天爵なりけり
虚勢のみ張りて實質微力なるは皆人間の事業なりけり

國政の一部と雖も野心家に任せる時は私利を貪ぼる
私利私慾外に物なき政治家に左右さる國禍なるかな
親密なる朋友の間は人の見て却つて疎なる如く思はる
念に念入れし事業の成果こそ天地に適する惠みなりけり
私の欲望なくば人の世は心痛むる災ひは無し
記憶力强き弱きは敏鈍の力を試めす度衡なりけり
日々に己を責めて世の人を賞むるは神の心に叶へり
前後無きは今日の日一日と思ひて一事をなほざりにすな
常識は神の誡の道學び得たる智慧より何ものもなし

人生に汗と油の無かりせば四魂五情の紅き血もなし
神ならぬ人の身なれば十全は難しと知りて直ぐに咎め
用の無き人は來らず必らずや裏面の在りと知りて交はれ
曲世には曲の策略も咎無しと唱へて曲が世を亂し行く
何事も取り過ぐるより他の人に與へ過ぐるぞ過ち尠なし
貸主の忘れたるをば奇貨として返戻せざるは盜人なりけり
村肝の人の心の行き交ひは天氣の如く定まりし無し
長上に辯解するは人として難事の中の難事なりけり
荒實の村には別に法規なし神の友垣法規を知らず

何事も己が心の迷ひより知らず識らずに敵招くなり
世の中に輕舉妄動する罪はいや永久に消ゆる事なし
世の中に學者賢者と稱へられ衆を愚弄し飯を食ふなり
慾望を制し切らずば必ずや死に制せらる世の中と知れ
一切に優らき人々押し並べて生れ乍らに自ら大なり
正しきを貫徹すれば强烈なる邪惡忽ち逃げ失するなり
憂愁に沈む心を押し開き歡喜の苑に遊ぶ信徒
逆境に立つは己れの淺見の罪にこそあれ運命にあらず
惟神かみに任かせば先見の明智自ら具はるものなり

先見の明智無ければ烏羽玉の暗世に如何で立つことを得む
千早振る神より出でし智慧なれば闇路行くとも過つこと無し
心安く樂しみ多き世の中を苦しみもがくは神知らぬ曲
月も日も清くさやけく照れる世に迷ふは慾の雲あればなり
思ふこと百分一も成らぬ世とくやむは曲の叫びなりけり
一善を爲さゞりし日は何んとなく心の不快を感ずるものなり
取り止めも無き法螺を吹く人間の多き暗世に心ゆるすな
熱心が過ぎて失敗する人も多き世なれば程々にせよ
反對をさるれば之を應用し進めば大なる勝利とぞなる

不潔なる人の住家は病神の鎭座の地点となるぞ由々しき
目的と主義の貫徹望みなば先づ實行を第一とせよ
便秘は心身共に硬塞す流水の如靈魂を持て
家に風山林に火と人に虫何れも强き仇敵なりけり
目的の善良なれば方法も至つて輕く遂げ易からむ
餘る可き時を待ちつゝ財寶を貯え乍ら生涯苦しむ
嫉妬する女は屑と人言へど深き愛情籠れる故なり
不正なる人ほど努めて世の人に正直さうに裝ふものなり

○

漸くに西山檜のひもろぎを一株植ゑたり西南の角
一株を植ゑつける度高臺の景色の變るぞ樂しかりけり
今日もまたもろ〳〵二人舞ひ來り東の空に飛び立ちにけり
たま〳〵の雨に神苑の常磐木は頓に生氣の漂ひて見ゆ
黄昏れて明光殿に來て見れば雀の宿の靜かなるかも

○

自信なき人は何事なすとても皆中途にて腰を折るなり
偉大なる人は第一自信力信仰力の强きものなる

信仰の力は山をも動かすと聞けど容易に動かぬ世の中
神樣はたくみに人を造り過ぎ惡の多きに困りたまへり
俺が若し神樣ならばこんな世は疾くの昔に亡ぼしてゐる
食ひ潰しばかり澤山こしらへた神の後悔思ひやらるゝ
神樣は實に御偉い御方と思ふばかりで何もわからぬ
何かしも神樣の名を聞いてさへ身魂に力のつく思ひする
あつさりとした神樣を難かしう神主坊主がこぜ上げて居る
難かしい神なら信仰したくないむつかし親爺に後悔した身は
釋迦如來八万四千の經卷も蔵じつむれば斷念の二字

佛教は恰も百合根の如くなりむけばむくほど何もなくなる

古への祖先の罪が報ゆとは譯のわからぬ基教なるかな

蛸坊主宗圓法に鉢卷し藥鑵に湯氣をたぎらすをかしさ

わづかなる餌に釣られて蛸坊主法の本城破らんとする

信教の自由を奪ふ宗法に躍起運動なせる蛸かな

○

梅の咲く春も追々近づきて心も豊かになりにけるかな

梅に桃櫻の花とおひ〳〵に匂ふ春日の待たれけるかな

猫柳早白々と芽をむきて賤が垣根に春は來にけり

屋根づたひさかりの來たる雄雌の猫の叫びのやかましきかな

猫までが春の陽氣に浮かされて屋根にのぼれり雄を慰ひつゝ

無雜作に障子の紙をかき破り戀に狂へる雌猫いぢらし

萩の家の女主人を友として雌猫のすまが入りびたりする

○

大空に雲ふさがりて暗闇の中より小雨降りそぼちけり

小夜更けて四邊靜けき高殿に明日の雨をば感じつゝ眠る

三月二日　於高天閣

西北の風吹き荒み高殿の玻璃戸に打つかる騒がしき朝
穴太より上田和一氏入り來たり四百余坪の登記了へけり
高殿に吹く風強く月の宮の庭樹に杖を支へてしかな
風寒く吹き荒めども天津日は雲間を分けて下界照らせり
風の音ゴウ〳〵高く響きつゝ寒さ襲へど春心地する
高殿の玻璃戸を高くたゝきつゝ終日荒さぶ雪起しかな

○

面白き日々の生活する時は遂に溺没するものと知れ
同人に二度び三度び欺きるゝ人は天虚の馬鹿者なりけり
馬鹿者と知りつゝ同じ曲人に知りて欺さる吾は大馬鹿
眼を閉ぢてあれば眠ると思ふなよ人の知らざる世界に遊べる
何事も豫定なければ順序なし順序は神のものなればなり
世の中の他人は殘らず吾友の友とし知りて清く交はれ
いたつきに惱むは遊惰の稅金と悟りて日々の業務を勵めよ
過失は皆怠慢の罪ぞかし手足をまめに道に仕へよ

身に魂に曲事あらば人恐れ時じく邪人に脅喝されなむ
現し代の人を敎へず捨て置けば惡事を爲すなり宗敎要あり
天地に愧づる疚しき心あらば其の精靈に始終攻めらる
世の人を屬るものは必ずや吾身の惡を晒すものなり
物事は其原因を調ぶれば結果は自然と分るものなり
熱情の更改によりて貞節は準諒されん臨まじくせよ
盜人は必ず盜子を養はず己れの惡を蔽へばなりけり
何事も惡例並べて比較する人はまことの曲者なりけり
安樂にのみ耽りなば末遂に暗黑界に墮落するなり

自發的一つの小長ある人は衣食に不足告ぐる事無し
博士號持たねど博士にいや勝る學者は世界に數多あるべし
くよ〳〵と物事悔やむ暇あれば大小と無く行ひて見よ
天の下皆悉く無慾者の自由所得の世界なりけり
公の爲に爭ふ人々は神の御眼より罪とはならじ
私慾するための快樂は何となく心の底に不快を覺えむ
物事に注意をすれば人の世は過ち防ぐ大價とぞなる
外交は國民を賭して遊まねばいつ〳〵までも失敗を取る
色戀は姻戚なれども大なる敵ともなりて人を亡ぼす

物事を諫とせぬ人悉く吾に刃向ふ敵人と知れ
大本の神の大道にあるものは先づ敵人を言向け和はせよ
確固たる方針立てずに家を出る人は路頭に逢ふとこそ知れ
人間に區別無けれど心魂の清濁により浮き沈みあり
得意なる地位に坐しなば其の上の榮譽益ます沈勇たるべし
惜しくとも取られたる身は取るよりも勝りて吉しと心なやむな
吾地位を望める人に與ふるは必ず後日取る爲となる
吾年を指折り數へ老い行くを悔む心は既に死したり
人の世に用し無ければ生命の無きと等しく寂しきものなる

安々と家族は殘らず眠れども家長は深夜眠らぬ者なり
覇者は皆天下に無理を爲すものと覺れば斯の世に爭ひも無し
反省は後悔なれど人々は日々の業務に反省なすべし
曲人の時を得るてふ闇の世は正しき人を爪彈きする
爭ひは小事に快く負けて大事に勝つが成功の鍵
吾四圍は皆障害と諦めて不平抱かず事業にいそしめ
死して後現世に用の無きものは私利を漁りし凡人なりけり
規律のみ正しき人の機嫁取る事ほど難きは世の中になし
自信をば曲げての上の親切は却つて對者を困しむるなり

心身は自己の自由と云ひ乍ら神に依らずば眞の自由なし
愚なる兒に財産を遺すより神と道とに貢げ世の爲
村肝の心は動き安ければ神の御綱によりて繫げよ
默々として成し遂げし大業は眞に完全無缺なりけり
益良夫は神國の寶女子(をみなご)は家の寶ぞ大切にせよ
安逸を欲する時は人は皆病みたりし時思ひ出だせよ
無形なるものは世人に與ふべし有形物は與へざる良し
變り行く時代の潮に逆らふは身を亡ぼすの基とぞなる
文明の空氣神國に充ち〳〵て人の脚まで弱くなりけり

世の人に注意せらるゝ身となれば早世に人と成れるなりけり
世の人に命令すべき身となれば如何なる事も成らざるは無し
逆境に立つ身は大なる順境に向へるものと直(ただ)に進めよ
何事も祕密々々と云ひ乍ら大事の祕密明かす人かな
禮儀とは交情にして慇懃は謝罪の意味を含むものなり
堪忍の峠の絶頂究むれば意外に短かきものにぞ有りける
物事は完全すれば行詰まり又缺点の山に近づく
世の爲に善きこと爲せば不思議にも人にきらはる暗世なりけり
手間入れて造りし物に一つとして碌な物なし程々にせよ

一切の事に疑問を抱く間はまだ小人の境を脱せず
世の中の總ては區々の感情の爭ひなりせば神に在れ人
類まれて直ちに承諾する人は淺考薄慮の化身なりけり

○

西山の檜の木運搬手間取りて山下におろせし儘に歸れり
今日も亦月並の和歌宗匠の分漸くに選み了へたり
宮樣の招待に由り宇知麿は吾代理とし京都に上れり
信徒に贈る短册書く間さへ無きまで忙はしく今日も暮れたり

雪の窓引きあけ乍ら思ふかな蝦夷宣傳の敎の司を
大火桶抱へてしみ〴〵西山に木出しの信徒偲びけるかな
窓開き未だ晴れやらぬ朝霧のたなびける良し愛宕に陽は刺し
初春の雪まだ殘る山峽に湧き立つ霧を床しみて見し
初春の暖かき日の山路行きて木蔭に殘る雪見出でたり
淨瑠璃を語りて吾妹子は樂しまむ吾れ花明山に在りて物思ふ
昨夕の風漸く止みて神苑に雀の啼く音長閑に聞こゆる
晴れ渡る初春の空に二羽の鳶舞ひつ來たれり愛宕の峰より

小夜更けて吹雪は止まず赤々と角のうどん屋未だ起きて居り
向つ山杣の焚く火の薄白く風になびきて山を捲き居り
吾家の雌猫は此の頃にはだちて何方行きしか姿を見せず
外濠の汀に乙女の芹摘めりまだ手のさきの冷たき春日に
瑞月門階段の上に積む雪を犬の仔踏める跡のしるきも
里の子の揚げたる凧の裸木の梢にかゝりて震へる寒げさ
花明山の松にかゝれる白雪の雫一滴に首縮めけり
裸木の櫟の梢に月冴えて仰げば頬を背むる寒風

庭丁の掃き集めたる櫟葉を掻きひろげつゝ家鶏餌を漁れり
凍りたる土堤の新道からくゝと音立てゝ行く空車かな
凍りたる櫟の枯葉しつとりと重々しげに風に落ち來ぬ
愛宕山峰吹く風の音遠く高臺かすめて日は暮れにけり
淡雪の降りしく眞晝木犀の茂みに集へり小雀の群れ
ほつとりと陽は暮果てゝ歸り來る雪の山路の寂しくもあるかな
枯れしかと思ふ柳の池の面にうつりし影の春の色かな
向つ山又新しく見えにけり朝より降れる雪の晴れしゆ

空氣銃庭木の雀ねらひ撃てば音のみにして雪の葉の落つ

しとゝ降り積む雪に家鶏の聲遠々しく聞こえ來るかな

初春の寒さ一入襲ひけり西山の端に陽の落ちてより

手傳の焚火の跡の黒々と氷柱立つ初春の朝

玉の井の底まで光る十五夜の月は御空の鏡なりけり

星一つ天の河原を横切りて遠く巽の空に消えたり

何氣なく窓あけ見れば音もなく淡雪降れり庭のおもてに

西山に陽は落ち乍ら風寒く暮れ殘りたる雪の山かな

三月三日　於高天閣

今日も亦朝未明より吹雪して寒さ身に浸む高天閣かな

湯に入りて髭剃り落し庭の面見れば吾頰に吹く風冷たし

今日も亦献勞者たち西山へ庭樹運搬せんために行く

四方の山淡雪まだらに積りつゝ天恩郷に風吹え猛る

風の音いや高臺に響きつゝ雪は時じく降り頻るなり

○

宗教團體なるものは眞に更生の經驗を經た宗教的生活のみの集團で、一個の社會的目標を持つた戰鬪的國家である。故に凡ての宗團はその勢力の增大せんことを望み、團員の增加を求むる一つの衝動を持つて居る。然るに現今の既成宗教なるものは殆んど凋落の域に沈んで何の生氣も活躍も無く、醉生夢死の狀態にて、僅にその餘端を保つて居るに過ぎない憐れな現狀である。斯くの如く今日の既成宗教の凋落した原因は、無論その宗教の指導者又は宣傳者、僧侶、教職、牧師等の腐敗墮落怠慢にも由るものであるが、更に彼等を腐敗墮落せしめ且つ怠慢に流れしめたる大根元は、立教者たる教祖一人の宗教的信念の中に潛んで居るやうである。彼等は神又は眞如又は佛陀又は實在とその名稱は種々變るにしても、或る特定の神祕力の働くと働かぬの如何に歸して居るものである。基督教の信者は基督の一種のいやな臭味があり、佛教は佛教の或る臭味があり、天理、金光、日蓮、眞宗、何れも一種異樣の臭味と妙な癖があつて、何れも教祖の神格に感染して今日宗教的凋落の非運を招致したものと

出口聖師の筆になる觀音

より考へられないのである。味噌の味噌臭き は眞の上等味噌で無いと同樣に宗教家の宗教家臭い行り方が今日の既成宗教に禍して 見る蔭も無き憐れな宗團に落して了つたのである。吾々大本人は前事の覆へるを見る後事として自ら戒しめなければならぬと思ふ。

○

古へ寛仁大度の君公は其の臣下の過失に對し今回に限つて何事も忘れて遣はす、 以後は必ず注意せよと言つて其の罪を不問に附したのは神の如き仁慈を以て 臣下を愛撫したのである凡て何事にても忘れると言ふ事は尊いことである。 自分はいつも各理の信徒から電信や書狀を以て『ヤマヒキトク カミサマヘ オワビタノム』とか。又は『今一度本復する樣御願ひ被下度』とか申し來るもの引きも切らない狀態であるが、 自分は其時限りで全然忘れて居るのである。そうすると全快の禮電が來たり禮狀が來るが、 少しも覺えて居ない。自分が忘れず覺えて日夜祈願を凝らす樣では決して依頼者の苦惱を救ふ事は出來ぬ。 忘れて遣ればこそ、

又依頼者も病苦を忘れて快癒するに到るのである……と 話して居る處へ明月女史が訪ひ來たり、『聖師樣どうか忘れられては困りますから信徒の中に 私も居る事だけは忘れないで覺えて居て下さい。何んだか心細い氣になります』と云ふ。 そこで自分は『よろしいあなたのそのサックだけ忘れて上げやう』と笑つたら『どうぞ私の身の上を忘れずに守つて下さい』といつて歸つた。 忘れられる事は誰人もいやだと見えるがもしも『覺えて居やがれ』と捨豪辭でも遣された時は余り好い氣がせぬものだのに覺えて居つて下さい と云ふ明月女史も餘り大悟徹底して居ない樣にも思はれた。

○

日本帝國臣民は帝國憲法第二十八條に於て 信教の自由を許されて居る以上は、如何なる宗教を信ずるも信ぜざるも信じさせるも自由であり 教ふるも教へらるゝも又自由である。然るに今回議會に提出された宗教團體法案の如きは信教自由の精神に戻り、 國民の信仰を法律を

以て制縛せんとする惡法である。 花井博士の問ひに對し、當局大臣は『信教の自由には歴代の政府は結社を認めて居ない』と答へて居らるゝが、 信教の結果は自然團體となり結社となるは當然である。 凡て法律なるものは人の行爲を制御するものであつて、形の上に現はれないものは罰する事は出來ない。 茲に人ありて心の内に或る人を殺さんと思ひ又は或る財産を占領せんと思つて居た所で、 之れが行爲に顯はれず心中深く藏するに於ては法律を以てしては如何とも左右する事は出來ない。 是は宗教家に一任するか神佛の心に任せるより外に途はないのである。 憲法は吾人に對し只心中に於ける信教の自由を許されたのでは無いことは辯明を待たぬのである。 教會所を建つるも、宣傳使を遣るも、儀式を執行するも、團體を造るも、一切自由なる可き筈である。 心の中のみの信教自由なれば憲法に制定さるゝ必要は無いではないか。 宗團法なるものは第一この点に於て大なる錯誤がある。故に幾度提出されても通過せぬのは當然である。

○

幸福は家内揃うて睦まじく暮すにまさる歡びはなし

產業の外の事業の一切は皆空業と覺るべきなり

神界の眞の事業は產業にあらねど唯一の實業と知れ

現し世の濁りに濁り亂るゝはみな黃金の禍ひなりけり

百難の一時に迫り來るとも決心の刄に亡び行くなり

主の神の造りたまひし蒼空と地中を用ふる彌勒の御代かな

我國の歷史を知りたる其上に人に語れば愧づる事なし

私慾なき人は天地の幸福を獨占すべき特權を持つ

自信力自由に用ふる眞人を完全無缺の人と云ふなり

世の中に生れし人は一度は必らず悲劇を味ふと知れ

何事も善意に利用する人は現の世に餘裕の存する人なり

川海に釣魚を樂しむ閑人は神の所有を盜むものなり

身を修め心の中を治めずば四離滅裂の難を招かむ

大いなる不平の人は大いなる理想の人ぞ神に在る人

物事に變化來たすは心魂に安定の無き報酬なりけり

人間に私慾の念の無かりせば障壁も無く境界も無し

世の中は神の敎へに習はずば凡ての事に自由を失ふ

新らしく生れんとせば惟神神の御法を固く守れよ

我歴史回想すれば一切の事皆美味と感ずるものなり

無我無心無慾なりせば人の世に生死興亡絶えて有るなし

死すること恐るゝ者は殊更に他人より早く死するものなり

自我を捨て自慾捨つれば天地の間は獨り我物なりけり

他の人を斥け己れ立たんとて普く人に斥けらるなり

○

只さへも清きを雪の月の宮月にかゞやく眺め目出度し

今日も亦西山檜の木東南の高臺の角に植ゑ付けにけり

明光殿開卷の爲めたそがれて三冊の卷筆を染めたり

○

曲神は良いこと計りを並べたて吾れ潰さんと化けて來るなり

にこ〳〵と笑顔作つてうまいこと言つて出て來る日々の曲神

佛顔さへも三度の限りありもう此の上は尻喰へ狸番

どこまでも良い顔すれば附け上り鐵面下げて來たる曲神

宣信徒ならぬ諸人の訪問は求めんが爲め訪ひ來たるなり

神界に仕ふる身には凡俗に接する度に魂曇り行く
勝利さへ得れば官軍敗け取れば賊軍とする暗世なりけり
正しきを採りて曲神に敗けるとも何時かは眞の勝利をや得む
高台に西山檜植ゑ込みて仰げば高し月の宮殿
眞實の成功の無き人生は又眞實の失敗もなし
大厄の來たるも決して驚くなやがて大幸來らむ前提
百悶も只一決に如かぬなり身を輕くせよ神に任かせよ
大本の神の教は村肝の心を救ふ滋養劑なり
人力頼まず獨り働かばその德獨り手に握るなり

勞役のその傍に書籍ある人は大方孝子なりけり
表向き盜まざれども取る人は多き世の中注意なすべし
久方の天津御神は自らを助くる人に幸を給はむ
小成に安んじ油斷する時はすき間ねらつて大厄來たらむ
より以上良き神策は運用するその人の得る德にぞありける
人々の福を羨む心こそ禍ひ招く扇なりけり
正しきを守れる人は惡謀に逢ふも危機をば自ら脫せむ
貯ふるよりは寶は程々に使ふが効力多きものなり
舊恩を忘るゝものは世に立ちて榮えを得んこと一入難し

我利々々は一時の虚榮を充たすとも遂には罪に滅ぶものなり
天候の陰氣をかこつ人こそは心明快ならざる人なる
世の中に立つ方法を敎ふるは神の任さしの救主なりけり
荒金の地は萬有產出の基なりせばおろそかにすな
休めどもその利を得るは恒產の德にありせば安く暮れなん
苦も樂も心の決定一つにて自由自在に成る世なりけり
垂乳根の親の上天せし後ぞ子の獨立は認められなむ
黃金の力は眞理も屈すべしされど最後の力は神なり
金無くば首の無きより辛しとは能く世の人の言ふ言葉かな

金あれば萬事解決附くものと思ふは邪人の迷ひなりけり

○

十五夜の月の宮居の明かさかな
月雪に光の添はる月の宮
南天に朝のねむけをさましけり
吟聲のねむげに響く春の宵
牡丹咲く園靜なり初夏の風
門の口這入れば匂ふ牡丹かな
小雀も憚りてとぶ牡丹かな
大島を限りて棲むや瑠璃烏

咲くとても見る人はなし藪菖蒲
吾齢ひ壽ぐ庭の萬年青かな
いつ迄も見飽かぬ庭の萬年青かな
名を聞いてさへも床しき萬年青かな
鶯一羽立ちおくれたるあしたかな
喜界島茂る紫萬年青かな
鳩一羽立たむ仕度に羽根すぼめ
天國の神の使か紅い鳥
愛らしき小鳥の雛に見惚れけり

○

明光殿和歌卷開小夜更けて和氣靄々の裡に終れり
大空に雲塞がりて風寒く咫尺辨ぜず神苑寂しき

三月四日　於高天閣

並山に雪白々と殘りつゝ風和らかに朝日かゞやく
新道を馳せ行く自動車高殿ゆ遙かに見れば虫の如うなり

四五臺の自動車ブー〳〵音高く發車間際に停車場に馳す
白々と土埃り立つ土堤道を自轉車虫の如く馳す見ゆ
堀端の竹籔の枝眞つ直ぐに立ちて靜けき朝の花明山
愛宕山雪に輝く景色こそ見飽かざれども夕風寒し
裸木の中に交りて常磐木の綠に積もる雪の冴やけさ
北國の雪白々と黑き屋根に運びて來たる汽車寒げなり
この頃の風の寒さに積む雪を怖ぢてや春は逃げ去りにけり
六つの花庭の面に咲き乍ら春心地すも風の往き交ひ

天恩鄕春來たれども此の頃の寒さに裸木風浴びて泣く
花明ケ岡高臺に立ち南桑の野邊を見やれば白雪の國
靜かなる南桑の野に降り積める雪にかすめる山寺の鐘
朝戸出や高臺に立ち野邊見れば昨日に變る白雪の原
朝庭に積む白雪の美しさ人の踏むさへ惜まるゝかな
空かすむ愛宕の峰に見し雪を今日吾庭に親しく見るかな
玉敷の月の宮居にきら〳〵と光を添ふる朝晴れの雪
神苑も町家も雪の化粧してながめ淸しき朝の龜岡

白妙の衣を懸けたる如くなり御前の松に積める深雪は
堀の水凍りて寒き神苑は木枯寒く松の立ち居り
神苑の櫟林を瞰下して太く立ちたる雪の老松
老松の雄々しく立てる冬庭に雪を賞めつゝ酒汲みにけり
土堤を行く荷車の上に雪積みて曳く人の脚重々しく見ゆ

○

完全なる經營なれば何事も不時の災厄招くこと無し
神と君足乳根の愚知らざるは皆四つ脚の御魂なりけり

手を拍ちて拜跪熱禱するものは皆偽りの信徒なりけり
太祝詞長々唱へ私利をのみ祈るは眞の信徒にあらず
碌々と事をも爲さず日を暮す人は現世の寄生虫なり
汝が爲に一度反對せしものは一代反對するものと知れ
世の人を粘けんとせば容易に粘けられぬぞ現世の狀態
人間は氣候の變化と戰いて身を壯健に保ち得るなり
何事も人と契約する時は皆後悔の種子となるべし
不愉快の心家内に充ち滿てば遂には狂者と化するものなる
仁愛の徹底したる眞人は妄りに路傍の花さへ踏まず

人の身と心は用ゆる度毎に進歩發達するものぞかし

世の中の務と云へど結局は吾身の用を弁ずるものなり

明快に與へざりせば何事も人に與ふる理由虚(むな)しき

世の中は凡て程度を過ごしなば後中毒の苦難に遇はむ

世の中の眞の助けは死に向ふ病を救ふ神業なりけり

吾家の繼嗣を清く育つるに勝さる財産世の中に無し

萬端の事を修整なさざれば眞の樂は來らざる可し

邪心ある人は日夜に媚びるなり人の笑顔に心許すな

多數決モットーとする代議制は塔を築きし蟻にも等し

身心の具體化したる人こそは神の子神の宮にぞありける

○

我日本神洲の國民は古來抱擁性に富んで居た。そして固有の民族性に少しの動搖を來たさなかつた事は世界の驚異とする所である。世界の文化を悉く吸收して同化し精練して更により以上美くしきものとして更に之を世界に頒與する所に日本人の生命があり使命があるのである。然し横に世界文化を吸收して之を精練すればする程、縱に民族性が深めらるべき筈だのに、現代の日本は外來文化の暴風に吹き付けられるほど、固有の民族性の特長を喪ひつゝある狀態は、恰も根の枯れたる樹木に等しいものである。日本人は日本人として決して何物によつても冒されない天賦固有の文化的精神を持つて居る筈である。それが外來文化の浸蝕に由つて失はれんとする事は、祖國の山河が默視するに忍びざる所で無くてはならぬ。斯の

如き時に際して天災地變が忽焉として起り、國民に大なる警告と反省を促がした事は今代に始まつた事で無く、實に建國二千五百年の災變史の默示する所の大眞理である。近くは元和寛永、慶安、元祿、寶永、天明、安政、大正に起つた大地震と當時の世態人情との關係を回顧するも蓋し思ひ半ばに過ぐる物があるではないか。扨て吾國の記錄に存するもののみにても大小一千有餘の震災を數へる事が出來る。その中でも最も大地震と稱されて居るものが百二十三回、鎌倉時代の如きは平均五年目毎に大震災が有つたのである。覇府時代には大小三十六回の震災があつた。然も我國の發展が何時も是等の地震に負ふ所が多いのも不思議なる現象である。奈良が滅び京都が衰へ、そして江戸が大に興隆發展した歴史の過程を辿つて見れば、その間の消息が能く〳〵窺はれる。全體我國の文化その物は全く地震から咲き出した花の樣にも思はれる。天神天祖國祖神の我國を見捨て玉はぬ限り國民の生活が固定して腐敗墮落の極に達した度毎に地震の淨火が忽焉と見舞つて來て、一切の汚穢を洗練するのは、神國の神

國たる所以である。古語に曰ふ『小人をして天下を治めしむれば天祿永く絶えん、國家混亂すれば、天災地妖臻る』とあるのは、自然と人生の一體たる事を語つたものである。人間が墮落して奢侈淫逸に流れた時、自然なる母はその覺醒を促がす爲に諸種の災害を降し玉ふのであつて、而も地震は其の極罰である。我國に地震の多いのも神の寵兒なるが故である。自然否天神地祇の恩寵を被むることの多いだけ、それだけにその恩寵に背いた時の懲罰は一層烈しい道理である。若し地震が起らなければ人震が發りて其の怨怒を漏らすに至る。近くは天草四郎や由比民部之介、大塩平八郎乃至西郷隆盛の如き皆この人震に屬するものである。

○

雲近きあたりに住める貴人も利慾の念を持つとこそ知れ

見も知らぬ人の惱みを助くるは人たるものゝ正道なりけり

己が身の外は殘らず他人と思へば不平不滿來たらず
良き緣は夫婦仲よく山や野に勤しむ人にありとこそ知れ
世の中の凡ての人は我爲に最とも嚴なる監督者なり
狂人と誤解に優りて恐ろしきものは現の世に一つだに無し
愚なる人は目前の小慾に生死を賭して爭ふものなり
その人の行く先思ふ親切は凡俗の眼に寫らぬものなり
大いなる善者は万一間違へば人の恐るゝ大惡を爲す
何時までも疑問に苦しむ思考をば殺せば自然蘇生るなり
人々は己が思想に導かれ各自に居所を異にするなり

大局的打算なければ何事も錯誤のみにて災害となる
思ふ丈け至善を行ひ終へし身は夕べに死すとも恨む事なし
一切の社會の富は各自の共同なれば羨やむに足らず
自己の損にたとへなるとも公の損と思へば斷念して行け
山林を求むるならば後の爲必らず一谷所有する良し
現代の事物必ず然れ共を附するは凡て非理なる故なり
馬見れば必ず暴れ人を噛むものと思へば過つこと無し
大いなる廣告すれば必ずやその廣告を買ふものとなる
乘客は皆親族の惡人と思ひてあれば大差なからむ

平素より咬まるゝものと思ひつゝ咬まるゝものは凡人なりけり
時ありて大憤するは自他共に世上必要の鍵となるなり
金與へ酒を呑ませる瞬間は且那の稱號奉らるなり
知る事と知らざる事とは日々の事業の力に大關係あり
故郷を遠く離れて旅すれば一入家の戀しきものなり
曲神も亦惡人も吾生みし兒は愛すなり親心して
自然界吾人を慰めくるゝとも惱みしあれば心晴れずも
樂みの爲に花街に通ひつゝ悲み持ちて歸る朝かな
吾物を盜まれたるは永久の貯蓄なりせば嘆かぬが良し

熱誠の籠りし人は世の中の凡てに對して恐れぬものなり
萬有に通ずる眞の神力は自信の光に如くものは無し
何事も一度に足らせ幾度を繰り返へしなば味を失ふ
美味美食なりと雖も喉元を一度過ぐれば昧ひもなし
世を益し人を益せぬ快樂は有害にして吾れをほろぼす
現し世は總て山師の管轄と思へば日々に悔ゆる事なし
その人の自由の大と小により人格たちまち左右さるなり
攻守共に强氣ならずば忽ちに敵に本城居らるゝなり
物事に煩悶苦惱するものは世に捨てられし小人なりけり

何事も肺腑より出し腹を以て頭を御せば完成なすべし

大人は大海の如胸廣く大山の如識見高し

適當な所に存在するものは何彼に依らず事業成るなり

人生を活かすは眞の文化なり邪曲文化は人を死せしむ

人々を無理で泣かすはやがて吾が大湯泣の豫備にぞありける

物事は適當すればたちまちに惱みもなくて安く成るべし

下にある民は上位の民よりも益して正しく愛らしきかな

自己の身を節し世界の典型を成して外部に施こせ神の子

純眞な想像力は語を替えて言へば、卽ち通曉力なり

夫と婦とは相携へて進ますば凡て無意味に終るものなり

要諦は概略なるこそ一切のその結末は完美するなり

洋々たる希望なき身は生くるとも死したる人と曷(なん)ぞ選ばむ

物事に失望落胆する人は成功急性病者なりけり

戀愛を知らざる人は萬人に對して毫も同情心無し

人は皆その兇惡と害邪をば除けば天地の必要材なり

邪神の病ひは大事を悟り得ず小思連考するを言ふなり

○

改めて見直す庭の新植木

子の嫁が來てから女房に惚れ直し
室咲きの花も机上の桑えかな

○

如何なる仕事にても完成せしめんとするには至誠と徹底が必要である。仕事を三分五厘でうか〳〵としては眞の成功は出來るものではない。不世出の大英雄ナポレオンが或る時その頃名の知られた鍛冶工を招いて『汝我爲に如何なる銃丸も貫き得ざる甲冑を造らば、金一千萬フランを拂ひ與へん』と命じた。召集せられた三十餘名の鍛冶工は、直ちに製作に取掛り七十餘日間の後何れも是を製作して君前に持參した。そうして得意の色を滿面に浮べて一千萬フランを貰ふべく眼付きを据ゑて控へて居た。そこへ、ナポレオンが現はれ何萬といふ臣下の兵士を集めて『是を着て見よ、何れの製作が完全なか、一々之を試して見るのだ』と云つて短銃を腰間から取り出して起つた。サア斯うなると君命は熱火も辭せぬ、身命は何時でも

君王に捧ぐといつて大に忠臣振つて居た何萬の兵士どもは顏色を變じて一人も君前に進み出る者はない。三十餘名の鍛冶工も是に應ずるものが無い。一つ間違つたら一命は直ちに飛んで了ふのである。彼等は只々見えの良い物を製作して一千萬フランの金が欲しいより外には念慮の無い者計りであつたのだ。ナポレオンは兵士の意氣地無いのと鍛冶工の自信の無いのに火の如うになつて怒り出した。そこへ末席に控へて居た一人の青年鍛冶工が進み出で『私が其の任に當りませう』と云つて、從容として自分の製作した甲冑を環らした。それを幾萬の兵士と三十餘名の鍛冶工は如何になるものだらうかと瞳を丸らして凝視して居た。ナポレオンはピストルを以て一發之に中てた。銃丸は見事にはぢかれて空中に飛散した。そこで再び兵士の携ふる所の銃を取つて射た。矢張り貫く事が出來ない。ナポレオンは更に左右に命じて巨砲を轟き來らしめ是を試みんとした。傍に居る人々は手に汗を握つて恐る〳〵見て居た。ナポレオンが今や砲身を開かんとする刹那も青年鍛冶工は猶從容として顏色も變へぬ。

彼れ青年鍛冶工は如何にせば君王の身を護るの甲冑を製作し得るか、如何にもして完全なる甲冑を製作せんと日夜寢食を忘れて唯君王を思ふの忠誠心彼が全身に充滿し、誠心誠意利害を離れて七十余日の丹誠を凝らし、製作に勉勵したのであつた。故に如何なる巨砲と雖も之を貫く事能はずといふ自分の製作に大なる自信を有つて居たからである。そこでナポレオンは彼が態度の儼然たるを見て大に感じ『甲冑の堅き事汝の態度を見て知るべし、又試みるを要せず』と云つて一千萬フランの賞金を與へたといふ逸話がある。此の青年鍛冶工は實に其作品に全生命を籠めて居たのである。人生は要するに一個の戰場であり、吾人の生活は眞劍勝負である。宜い加減に誤魔化して行けるべきものでないのである。

三日五日　於高天閣

晨より雪チラつきて風の音高く聞ゆる月宮殿かな

西山の檜植ゑんと近侍等に命じてつゝじ植ゑ替へさせたり

月宮台あちこちつゝじ植ゑ込みていよ〳〵深く見ゆる大前

若人等西山檜運ばんと牛車もて穴太に出でゆく

西空に陽は傾きて若人等檜の植木運び歸れり

高天閣東北の庭に大檜黄昏の闇に植ゑ付けにけり

午後の二時梅田夫人を伴ひて二代は聖地に歸りてぞ行く
臺灣の二水支部より日出麿が安着の電送り來たれり
東國に出張したる梅田氏は戰闘あげて歸り來にけり
鮫年館留守居の爲に高麗氏今日より住み込む事となりけり
亀岡座活動寫眞觀覽の爲宗匠を伴ひてゆく
小夜更けて西北の風吹き荒み高殿の窓コト〳〵搖る
功力氏は吾を訪ねて珍らしき人參精を贈られにけり

○

愚鈍なる人の生命も心して用ふる時は强きものなり
一言を聞きて萬語を悟り得ぬ人はまことの暗愚なりけり
世の中に憚むべきは遊惰なる人より外に大なるは無し
足る事を知る人なれば不平なし富貴なる爲不滿生ずる
世の中に勝れて進歩する人は獨身の如く力の友無し
その素性判然せざる人こそは凡て邪神の變化と知るべし
事探き田舍の興亡盛衰は忽ち都會の死命を制する
物事の整理は總てその家の歴史を陳列するものなりけり
その人の新聞記事をその人に話すは非禮の極みなりけり

不明なる事業は利潤多くとも着手せぬこそ安全なりけり

世の人を澤山使役する人は惟神的に長壽者なりけり

今の世の人の品行押並べて表裏ありせば心許すな

世の車に實地の經驗ある人は讀書せずとも命中するなり

神と君親の殊恩を忘るゝは盗人よりも罪重きなり

聖者には世の人々の夢にだに窺ひ得ざる神德備はる

正當に自然は人事に曲折す是進展の一歩なりけり

惡しきには必ず蔭に惡神の後援者あり煽動者あり

何事も凡て實行するまでは口外せざれ曲多き世に

山林を造りて國の寶をば產む百姓は長壽保てり

より以上良く考ふる方法の勞働司配の主人なりけり

神に依る智慧にあらずば悉く何事なすも邪迷に終らん

世の中の眞理は純明簡便にあるこそ誠の眞にぞありける

人々は自己の創流あるべきぞ無ければ獸(けもの)と選ぶ事なし

吾力それより外は一切を參考として世の中に處せ

權利のみ云々する人世の中に義務を盡さぬ曲神と知れ

惡習と常費に捉へらるゝ身は終世大事を爲す事を得じ

人生は誤謬僻見脅迫と陰謀なれば油斷大敵

火を出だすものは血肉親交の間と知りて昔を慣しめ
理解力ある達人は何事も合点早く明快なりけり
重大な事物の世には數多く埋没あるを忘るゝな夢
神と君御祖の恩を知るための日月歴史と諦めて讀め
審明を知らんが爲の書と記錄大事に所有秘藏するなり
人生は一度艱苦に遇はざれば不幸此の上無きとこそ知れ
身勞は身健となり心勞は心健を得る基るなりけり
一家内和合無ければ自棄自暴遂には離散の憂目見るべし
愛嬌美全たき時は吾身をば永久に保護する良策となる

世の中は裏面し無くば公平に且つ平安に治まるものなり
山海の百の馳走を爲すよりも眞心一つを客はよろこぶ
正直な人の面貌は惡人の蔽はんとして止まぬものなる
人の世は悲慘の極み嘗めざれば天地の眞理に生く事難し

○

足利時代に於ける禪林の傑物と稱へられた慧春尼は尼僧として數ふるに足るべき貞操の固い尼僧であつた。慧春尼は、意思の弱いものと侮蔑された當時の女のために氣を吐いた譯である。彼れ能く得度し得たるは花顔月眉丈なす黒髮を剃氣もなく切り捨てた所にある。彼は性慾なんか問題にして居なかつた。それでも相應に戀の迫害を受けた。彼は赤裸々となつて陰部を開放するだけの勇氣があつた。彼が禪林に修ずる時某男僧から情交を要求せられて絶